

ORIGAMI TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

定価 635円
(本体605円)

クローズアップ Close-up

伏見康治先生 —夢を遺してくれた人—

Husimi Kōji —A Man with a Everlasting Dream—

三浦公亮、阿部 恒、布施知子、川崎敏和、西川誠司、やまぐち真

Miura Koryo, Abe Hisashi, Fuse Tomoko, Kawasaki Toshikazu,
Nishikawa Seiji, Yamaguchi Makoto

展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

にらみ鯛

No Eating! (Sea Bream)

五十嵐智祐

Igarashi Tomosuke

折り図 Diagrams

ツル

Crane

神谷哲史

Kamiya Satoshi



新連載 New Series

折線雑考

A Long Excursus on Crease Lines

目黒俊幸

Meguro Toshiyuki

つまみおり Information

オリガミUSA コンベンション 2008 レポート

OrigamiUSA Convention 2008 Report

通巻 110 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

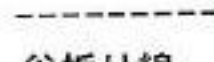
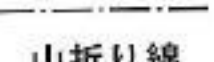
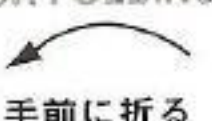
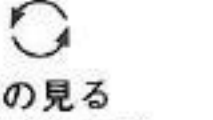
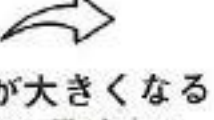
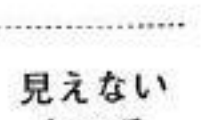
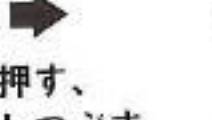
Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

 谷折り線 Line indicating valley fold	 山折り線 Line indicating mountain fold	 手前に折る Fold paper forwards	 後ろへ折る Fold paper backwards	 折り筋をつける Making a crease line	 段折り Pleat fold
 裏返す Turn paper over	 引き出す Pull out	 図の見る位置が変わる Rotation	 図が大きくなる A magnified view	 見えないところ A hidden line	 押す、押しつぶす Push paper in
					 切る Cut

にらみ鯛

作:五十嵐智祐(P.34)

No Eating! (Sea Bream)

by Igarashi Tomosuke (P.34)

■びっしり並んだ高密度のウロコ、鋭い眼光やギザギザの歯が強烈なインパクトを持つ顔面。それにしても、このような構造を引き出すには、果たして展開図がどんな凄まじい状態になっているのか？表情に勝るとも劣らず、ちょっと怖いことになっているかもしれません…。

(解説:北條高史) Comments: Hojyo Taka

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
 MAGAZINE
 CONTENTS

No. **110**



No Eating! (Sea Bream) : Igarashi Tomosuke

クローズアップ / Close-up

P.11 **伏見康治先生**
一夢を遺してくれた人

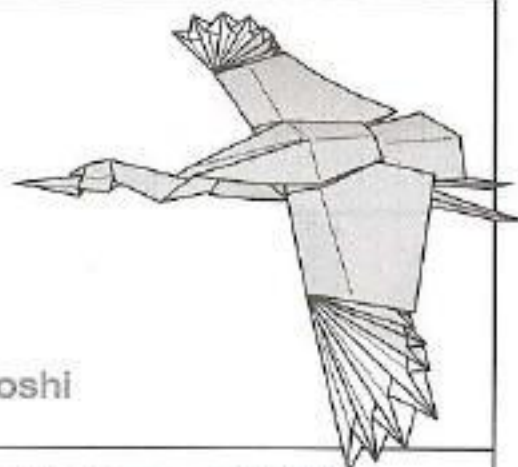
Husimi Koki

-A Man with a Everlasting Dream-

三浦公亮、阿部 恒、布施知子、
 川崎敏和、西川誠司、やまぐち真
 Miura Koryo, Abe Hisashi, Fuse Tomoko,
 Kawasaki Toshikazu, Nishikawa Seiji,
 Yamaguchi Makoto

折り図 / Diagrams and Crease Pattern

P.22 **ツル**
 Crane



神谷哲史
 Kamiya Satoshi

P.34 **展開図折りに挑戦!**
 Crease Pattern Challenge!

にらみ鯛

No Eating! (Sea Bream)

五十嵐智祐

Igarashi Tomosuke

カラーページ / Color

P.20 **オリガミ・フォトギャラリー**
 Origami Photo Gallery

解説・北條高史
 Comments : Hojyo Takashi

折り図 / Thematic Series with Diagrams

P.4 **kawacho のフレキシブル・ユニット**

kawacho's Modular Inventions Modulo Infinity

シェルユニット

Shell-Patterned Modules

川島英明

Kawashima Hideaki

P.8 **おりがみ我楽多市**

Origami Odds and Ends

川崎敏和

Kawasaki Toshikazu

折り鶴の変化

Varieties of Husimi Origami Cranes

読み物 / Articles

P.14 **折紙図書館の本棚から**

From the Bookshelves of the JOAS Library

前川 淳

Maekawa Jun

「折り紙の幾何学」

"Geometry of Origami"

P.16 **過去の折り紙に学ぶ**

デビッド・リスター

Learning from the Paperfolding of the Past

David Lister

ロバート・ハービン著「Paper Magic」について・後編

A Commentary on "Paper Magic"

by Robert Harbin. Part Two.

翻訳：羽鳥公士郎

Translator : Hatori Koshiro

P.18 **折線雑考**

A Long Excursus on Crease Lines

目黒俊幸

Meguro Toshiyuki

折線はひとりでは変わらない

Crease lines won't fold themselves.

P.35 **ペーパーフォルダーの横顔**

Paper Folders on File

佐藤直幹

Sato Naomiki

取材：前川 淳

Maekawa Jun

コラム / Columns

P.7 **折り紙の周辺**

Origami and Its Neighbors

布施知子

Fuse Tomoko

P.32 **おりすじ**

Orisuzi ("Fold-Creases")

谷田尚之

Yada Naoyuki

P.33 **折紙三昧**

Origami-Zanmai (This Origami and That)

西川誠司

Nishikawa Seiji

情報 / Information

P.36 **つまみおり** Rabbit Ear

OrigamiUSA コンベンションレポート

The OrigamiUSA Convention Report

kawacho's フレキシブル★ユニット

kawacho's Modular Inventions Modulo Infinity

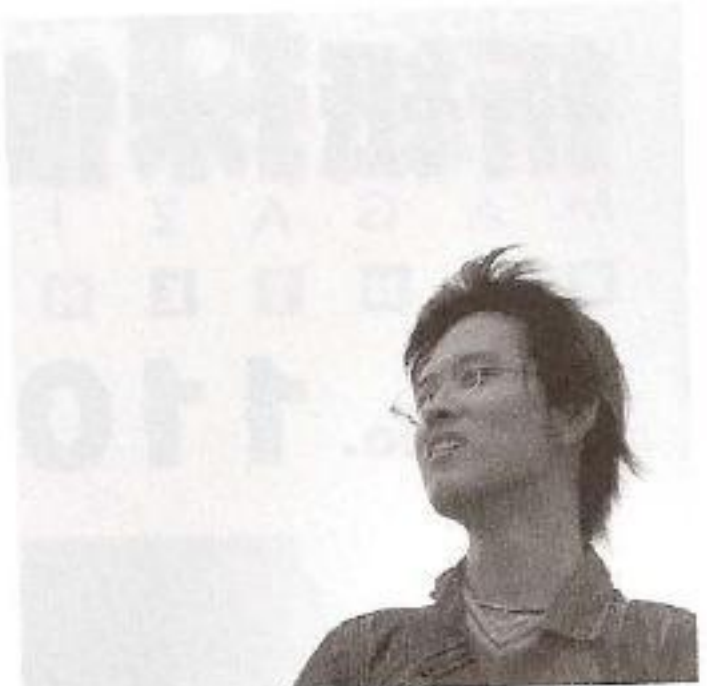
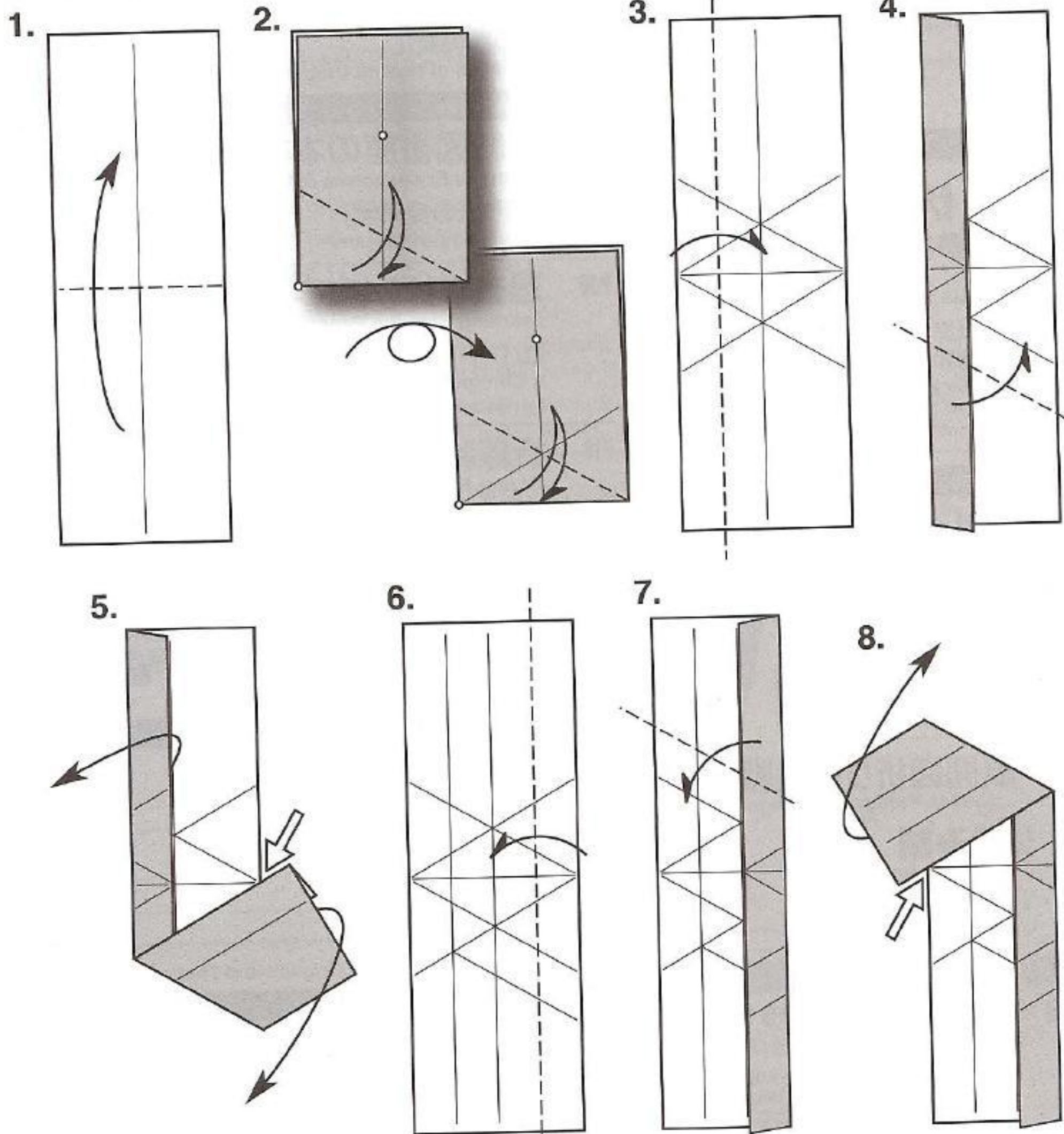
川島英明 Kawashima Hideaki

第2回 シェルユニット Shell-Patterned Unit

少し厚手の紙で折ると組んだときにしっかりします

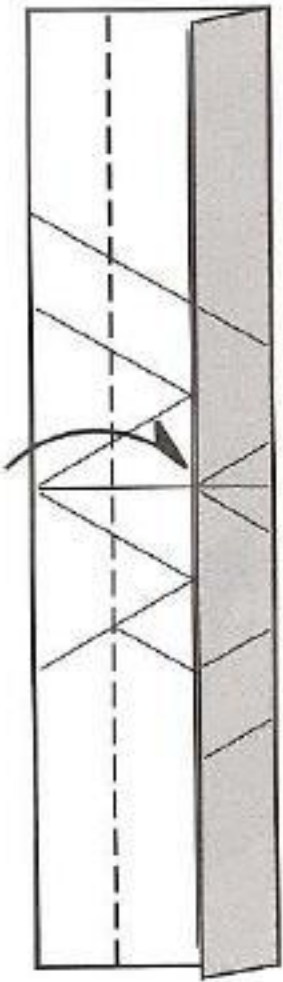
【パーツの折り方】

1:3の紙を使います

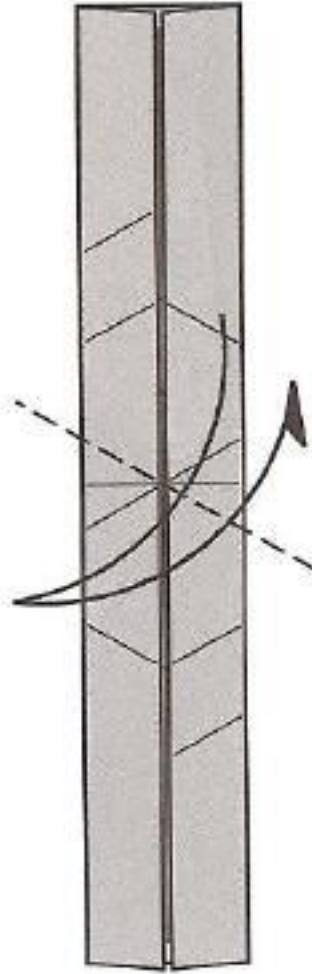


3月に大学を卒業しました。小田原で木工職人の親方の元で修行中。最近は紙よりも木に触れる時間の方が長いです。

9.



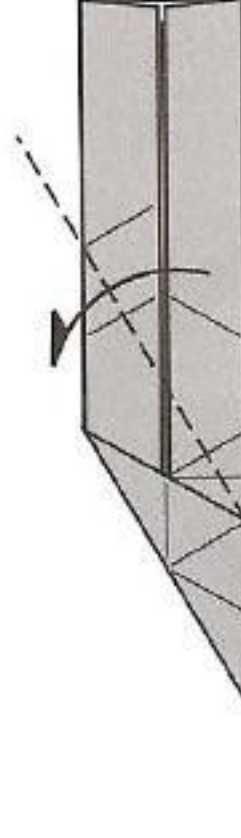
10.



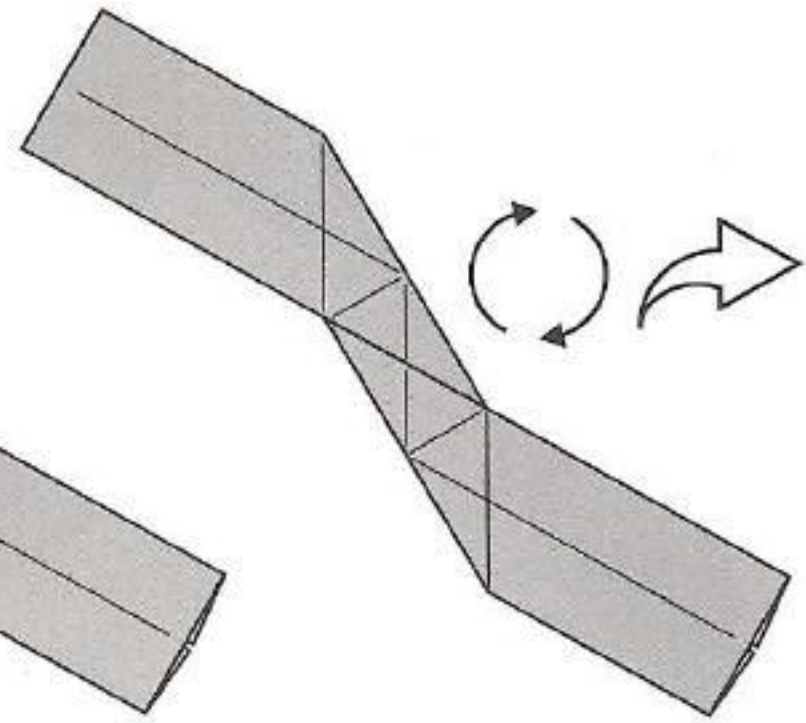
11.



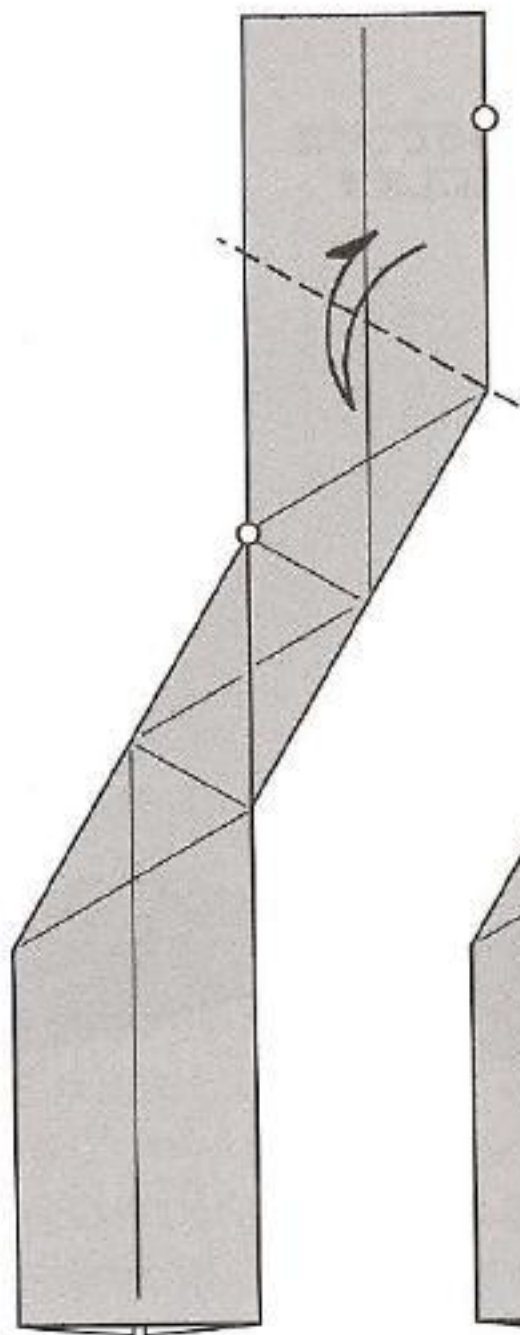
12.



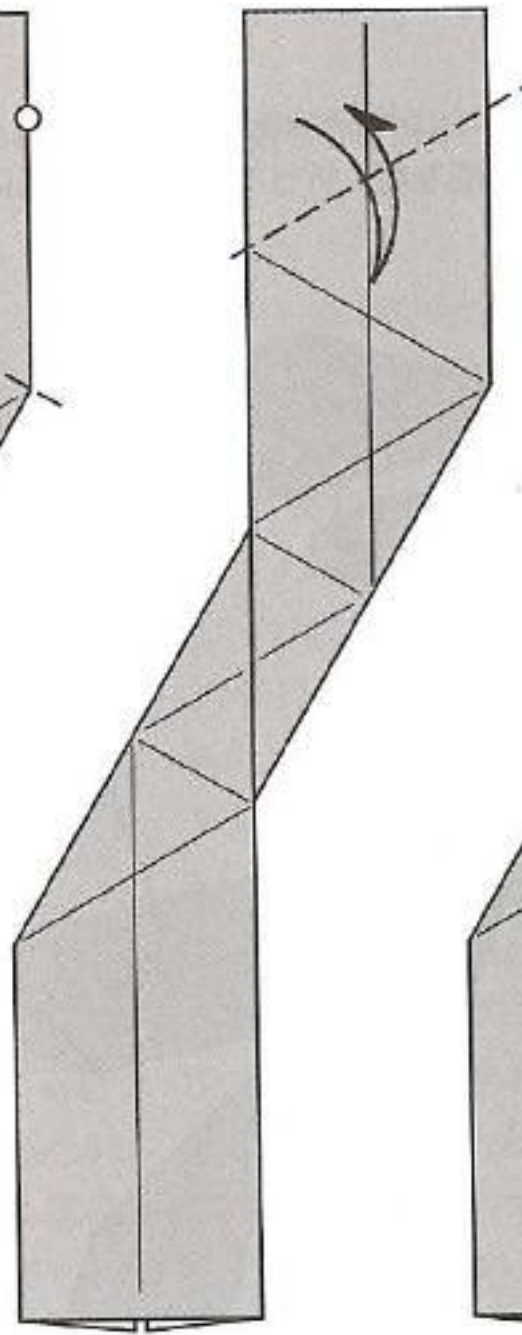
13.



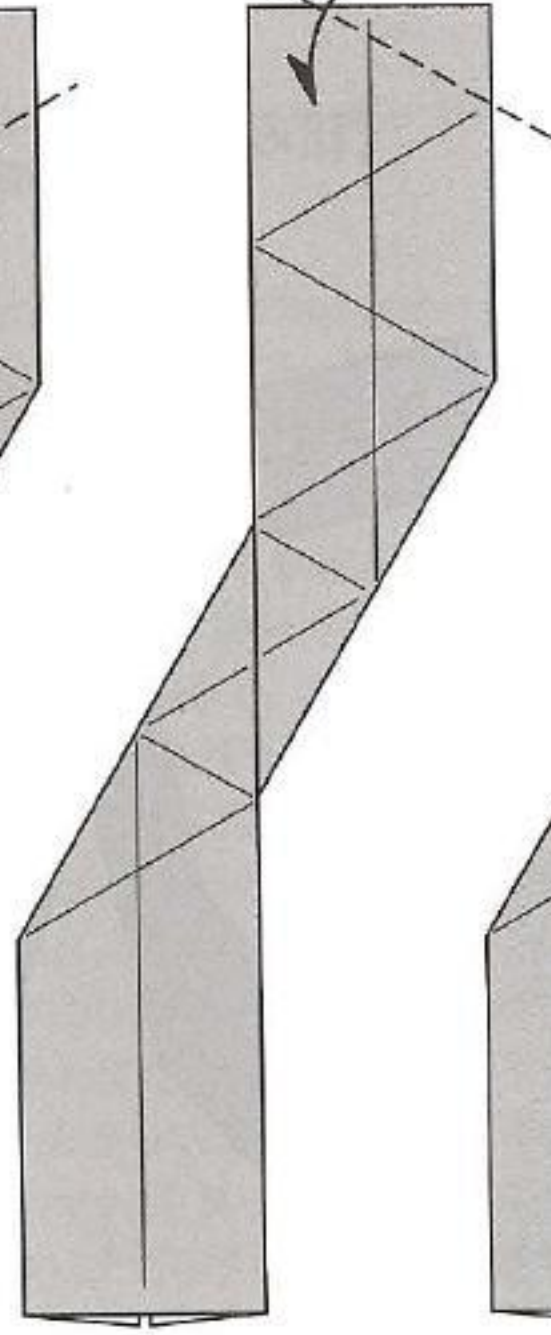
14.



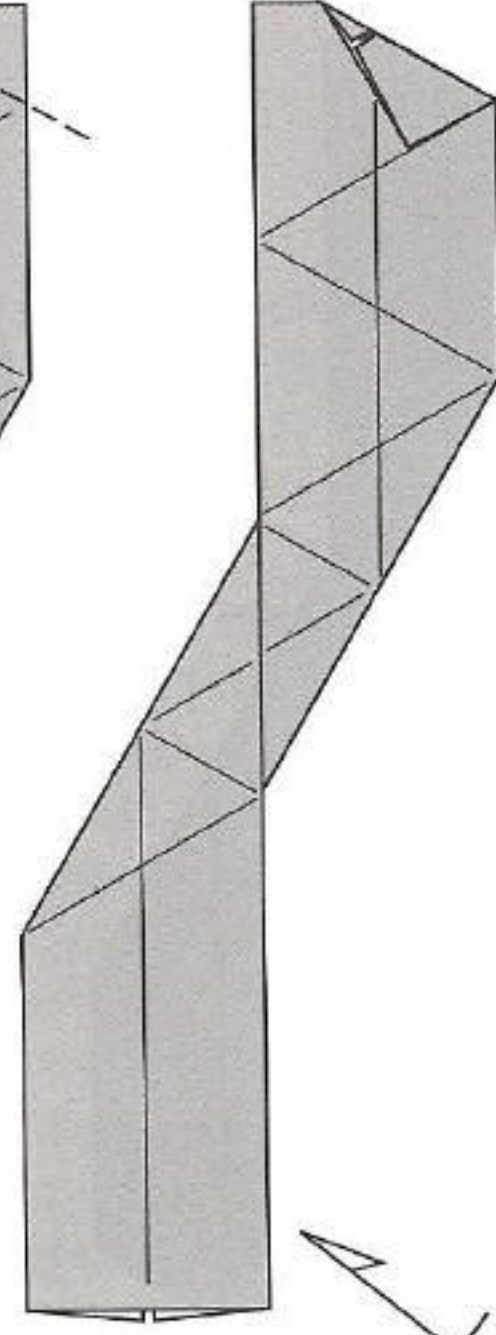
15.



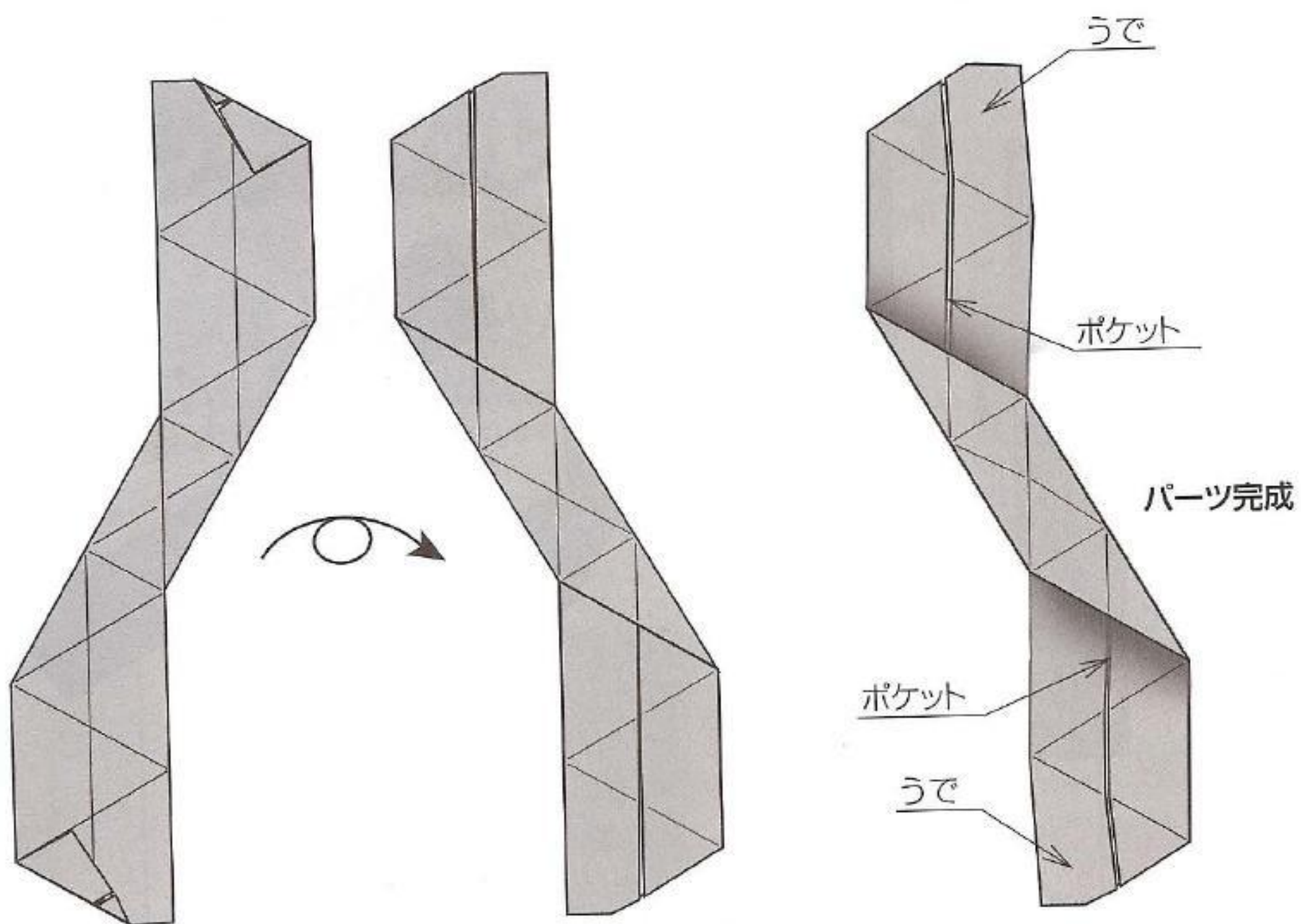
16.



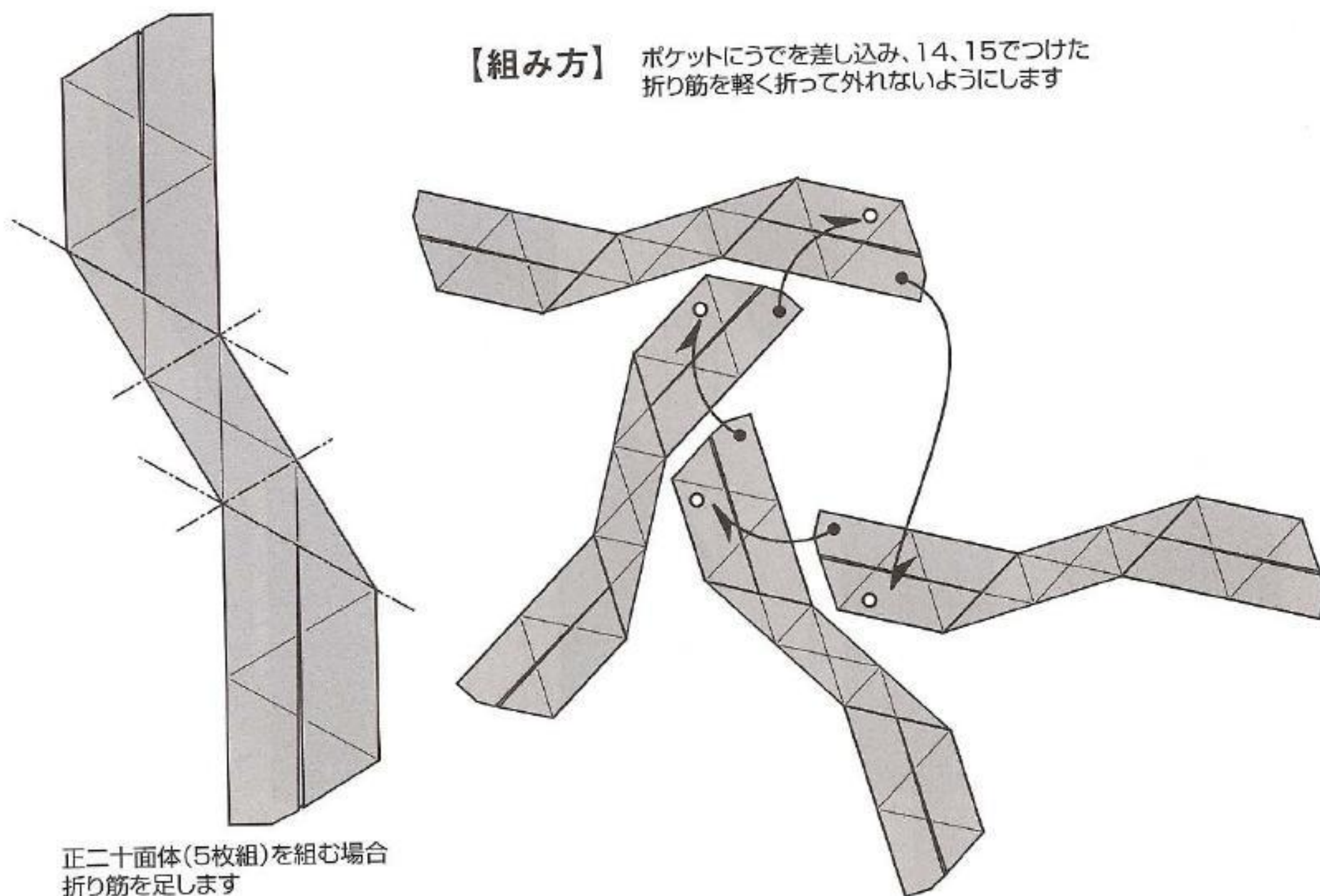
17.

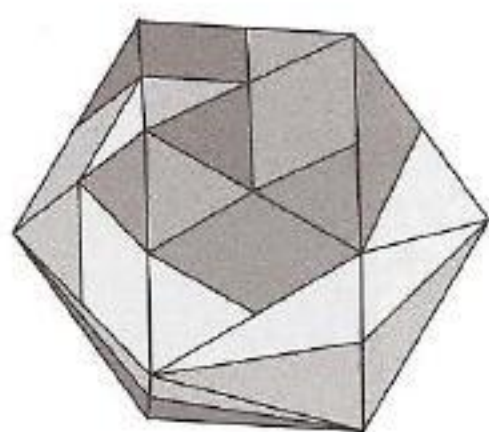


14-16

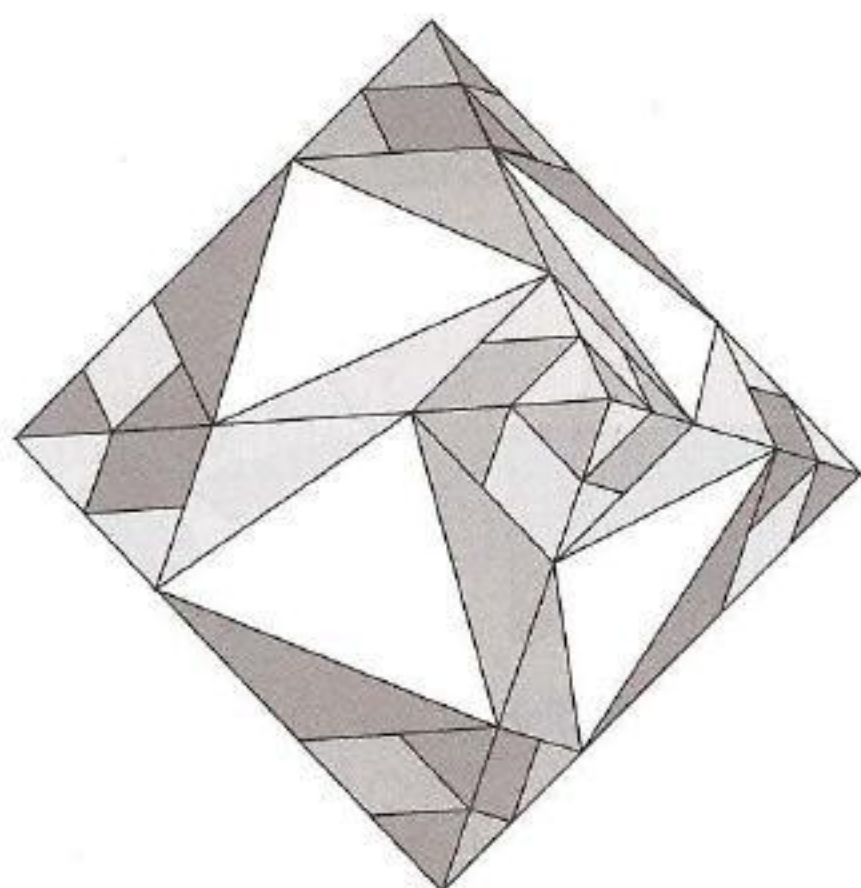


【組み方】 ポケットにうでを差し込み、14、15でつけた折り筋を軽く折って外れないようにします

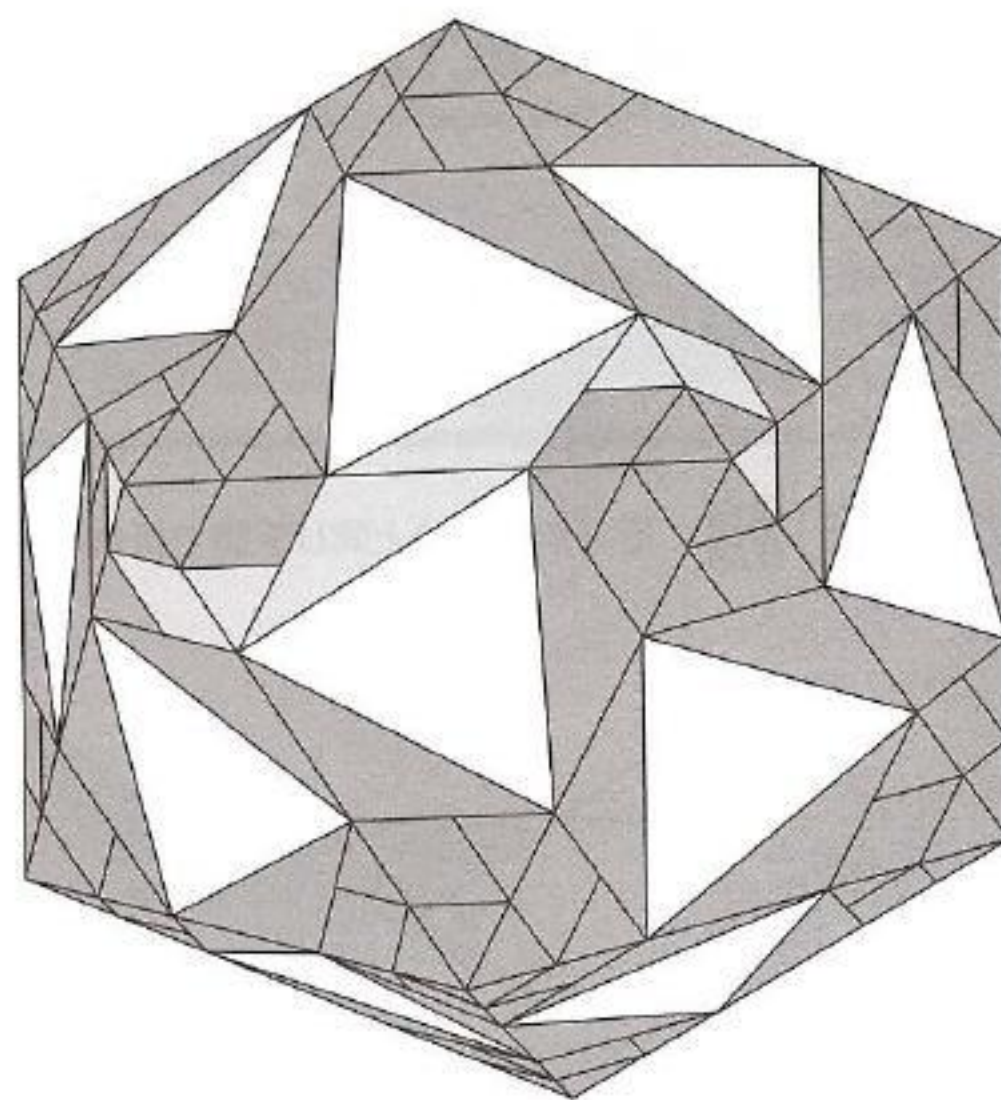




正二十面体(5枚組)



正八面体(12枚組)



正二十面体(30枚組)

正四面体も組めますが、頂点がかなり組みづらいです。

折り紙の 周辺

第30回

パソコン

"My" Diagrams Drawing
with Personal Computer's

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

折り図を描くソフトはフリーハンドを使っている。パソコンで図を描く手ほどきをしてくれたのは故吉野一生さん。マックをみつくりてもらい、ソフトをいれてもらい、ソフトには線の太さや塗りや諸々、彼が使っているものを設定して送ってもらった。おんぶにだっこである。今でも私のソフトには、どう使うかわからないものまで

含めて、彼が設定したものがそっくり残っている。吉野さんはずっと生きている。ありがとう。

パソコンで描いた折り図で本を出版したのはいつ頃か調べた。1994年はロットリングを使っただけの手描きで、1995年の「NHK出版」と「いしずえ」から。手描きは苦しかった。特に修正があるとたいへんだった。手描きの美しい図は賞賛するけれど、私にはもう無理。

春に使い慣れたフリーハンドの開発中止を知った。あわてたが他で読み取ることができるとわかってほっとした。これを機に新しいマックを買った。パソコンはわからないことだらけで、どたばたする。詳しい友人が近所にいないため、前川淳さんには相変わらず相当に迷惑をかけている。ありがとう。

ごめんなさい。いろんな人にやっかいをかけているのに、折り図描きはパソコンしか考えられない。これはどういう事態なのだろう。ひとたびトラブルが起きると自力で解決できないことが多い。テレビや冷蔵庫と同じと考えていいのだろうか。時代は加速し、のんきにその波にのっけてはいるが。

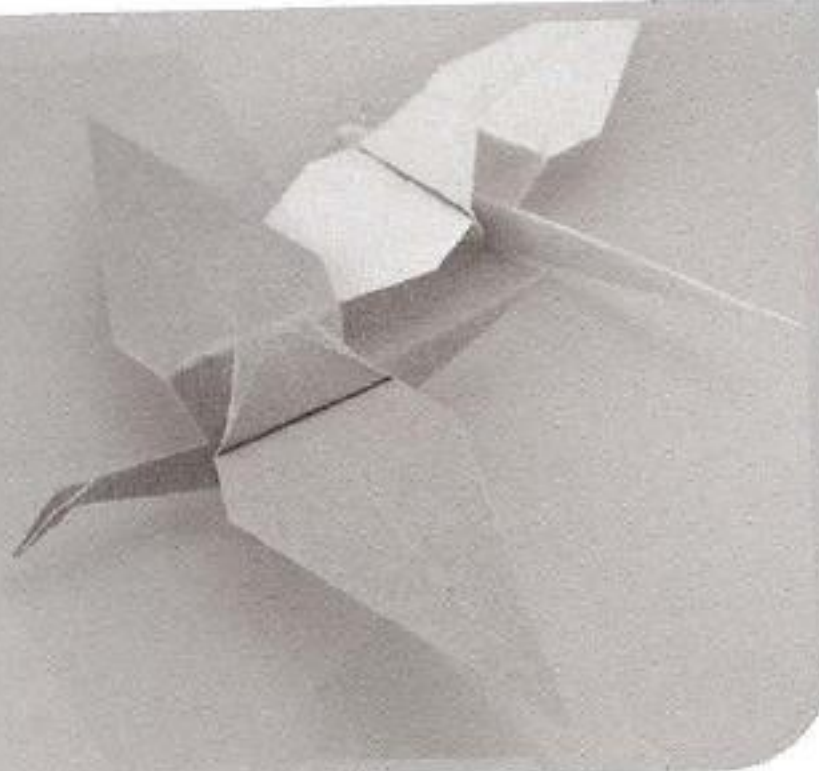
雨樋と屋根の隙間にシジュウカラが巣をかけた。濡れ縁に立つと結構見えるのに、ネコも届かない場所。例年玄関にツバメが巣をかけていたが、昨年おネコ様が信じられない跳躍力をみせてパンチをくらわせ、巣は卵ごと落ちた。それがあってか、今年は下見にきたものの、巣は作らずに終わった。行くもの来るもの、時代と環境の中で変わっていく。物も生き物も。

第31回 折り鶴の変化

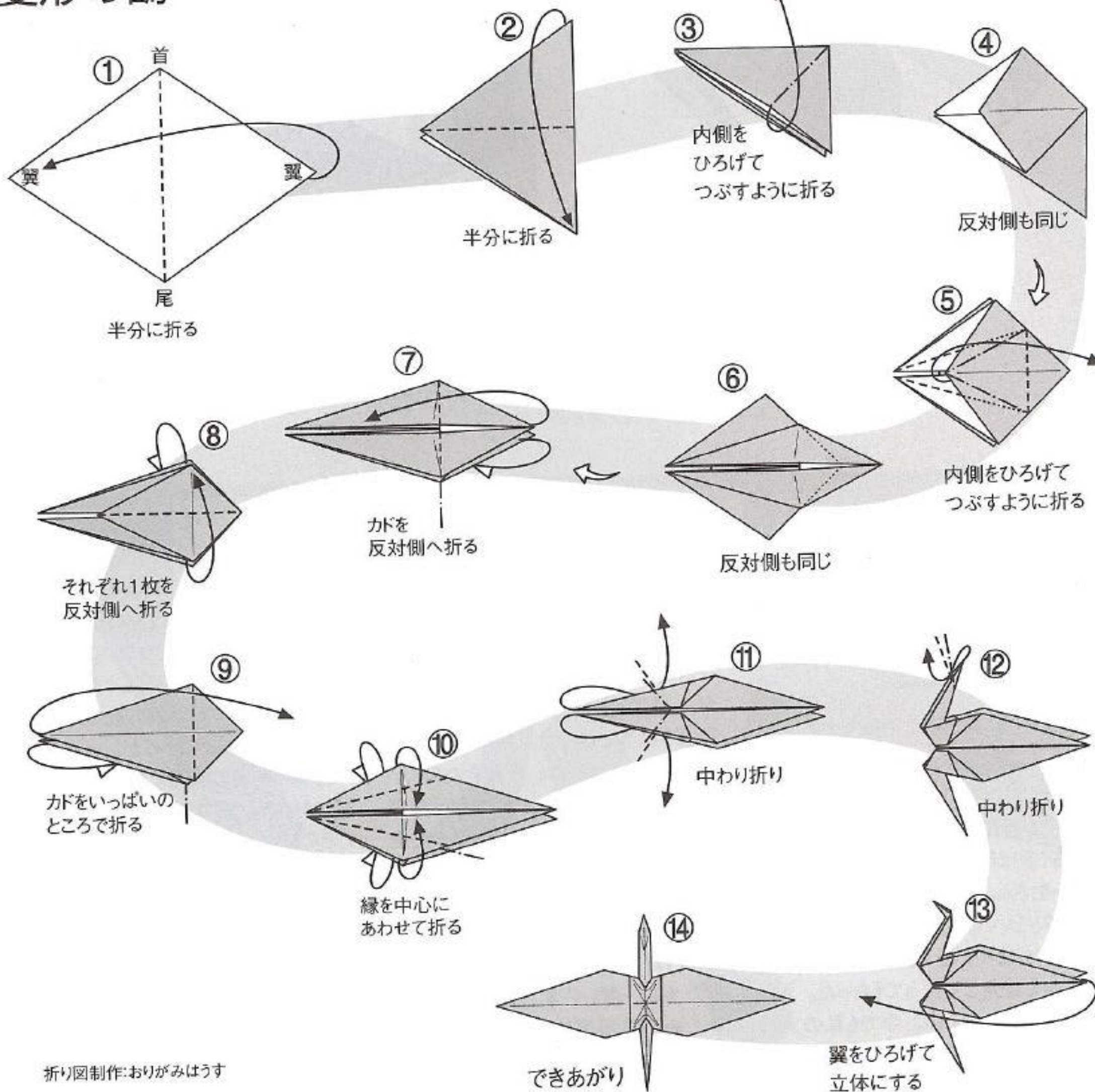
Varieties of Husimi Origami Cranes

作・伏見康治 + 伏見満枝
Husimi Kodi, Husimi Mitue

『折り紙の幾何学』(日本評論社, 1979)より、ご夫妻が「手」でみつけた、鶴を折るその手の働きから出てきた新しい真理発見の足跡を追ってみましょう。



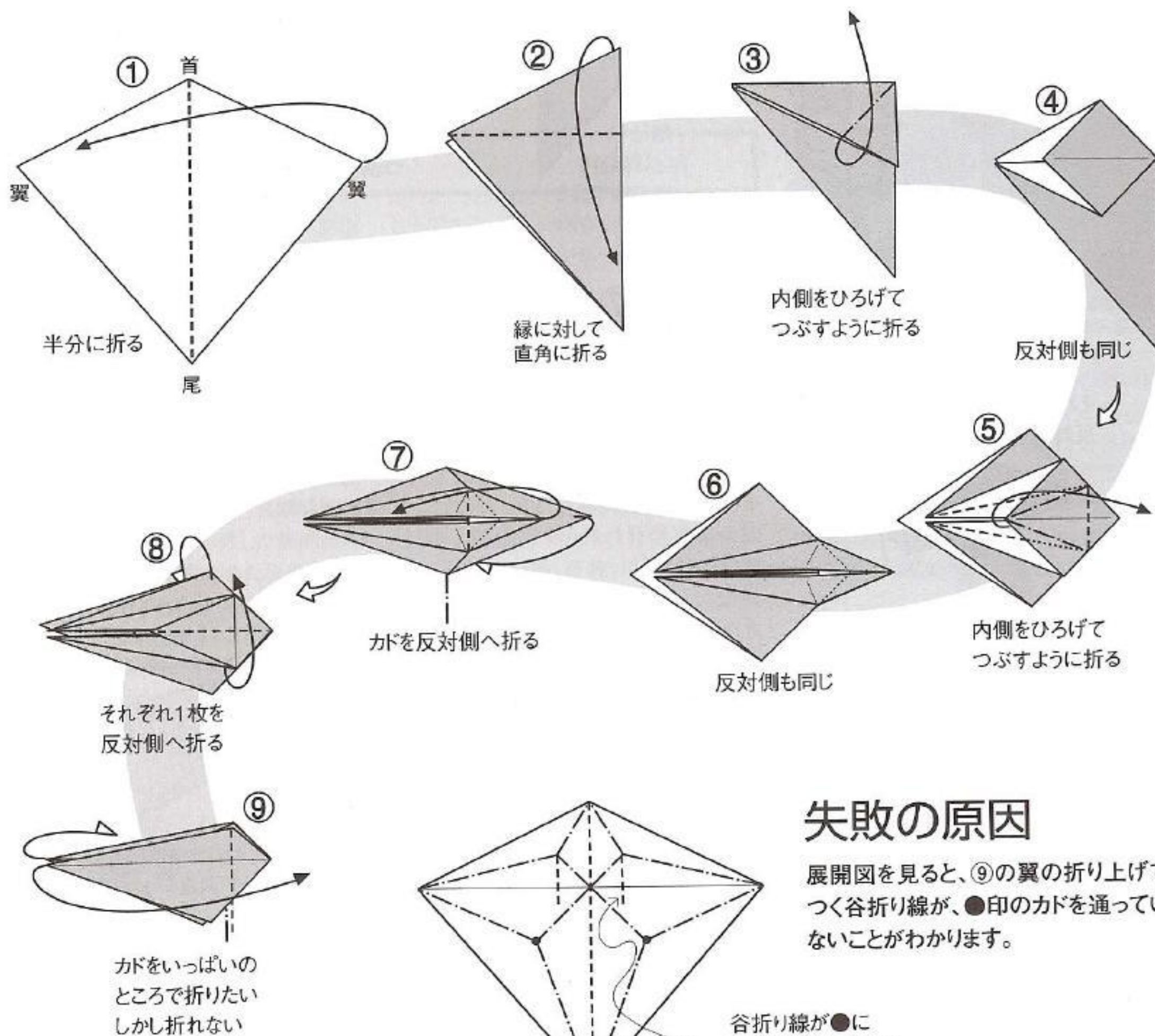
菱形の鶴 正方形の場合と同じ手順で折れます。



折り図制作: おりがみはうす

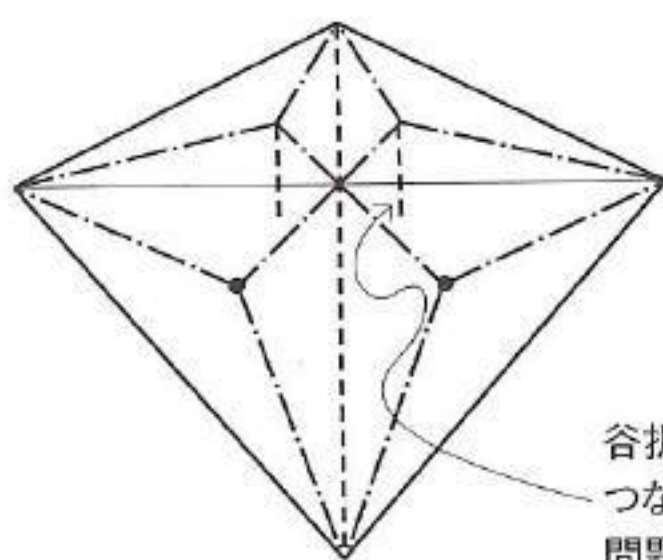
凧形の失敗鶴

菱形の対称性を落とした「凧形(長崎のはたの形)」を菱形鶴と同じ方法で折ると、図のようになります。首を折り、翼を広げると完成するように思えますが、折ってみると、翼の折り上げ(⑨)がうまくいかず、きれいな鶴の基本形になりません。



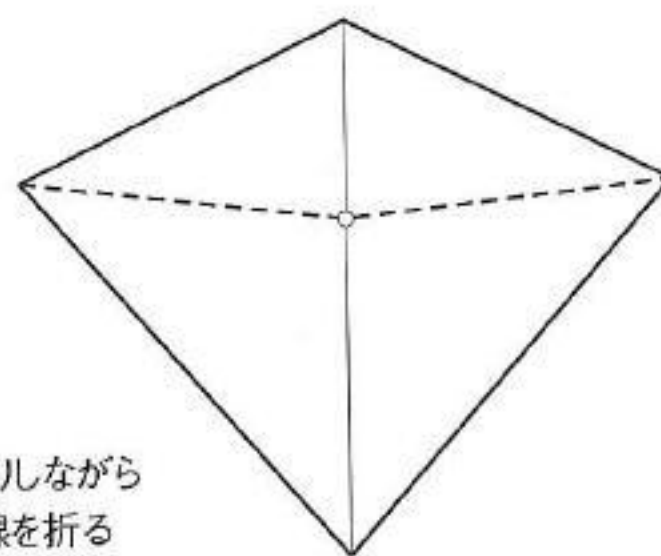
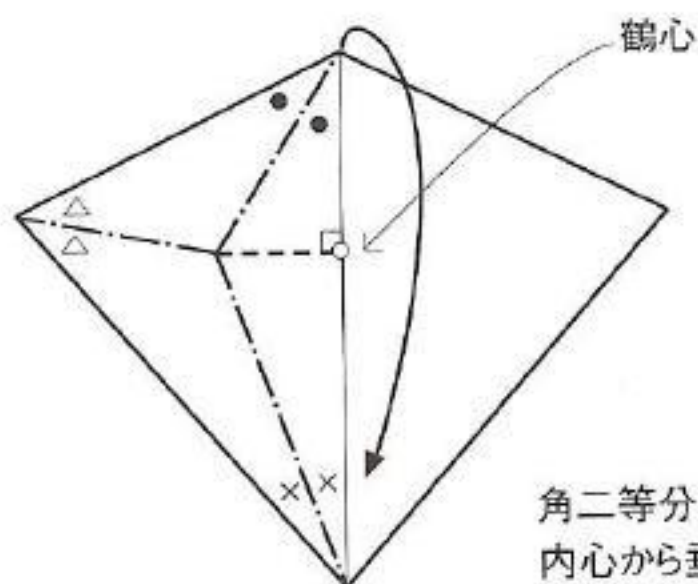
失敗の原因

展開図を見ると、⑨の翼の折り上げでつく谷折り線が、●印のカドを通っていないことがわかります。

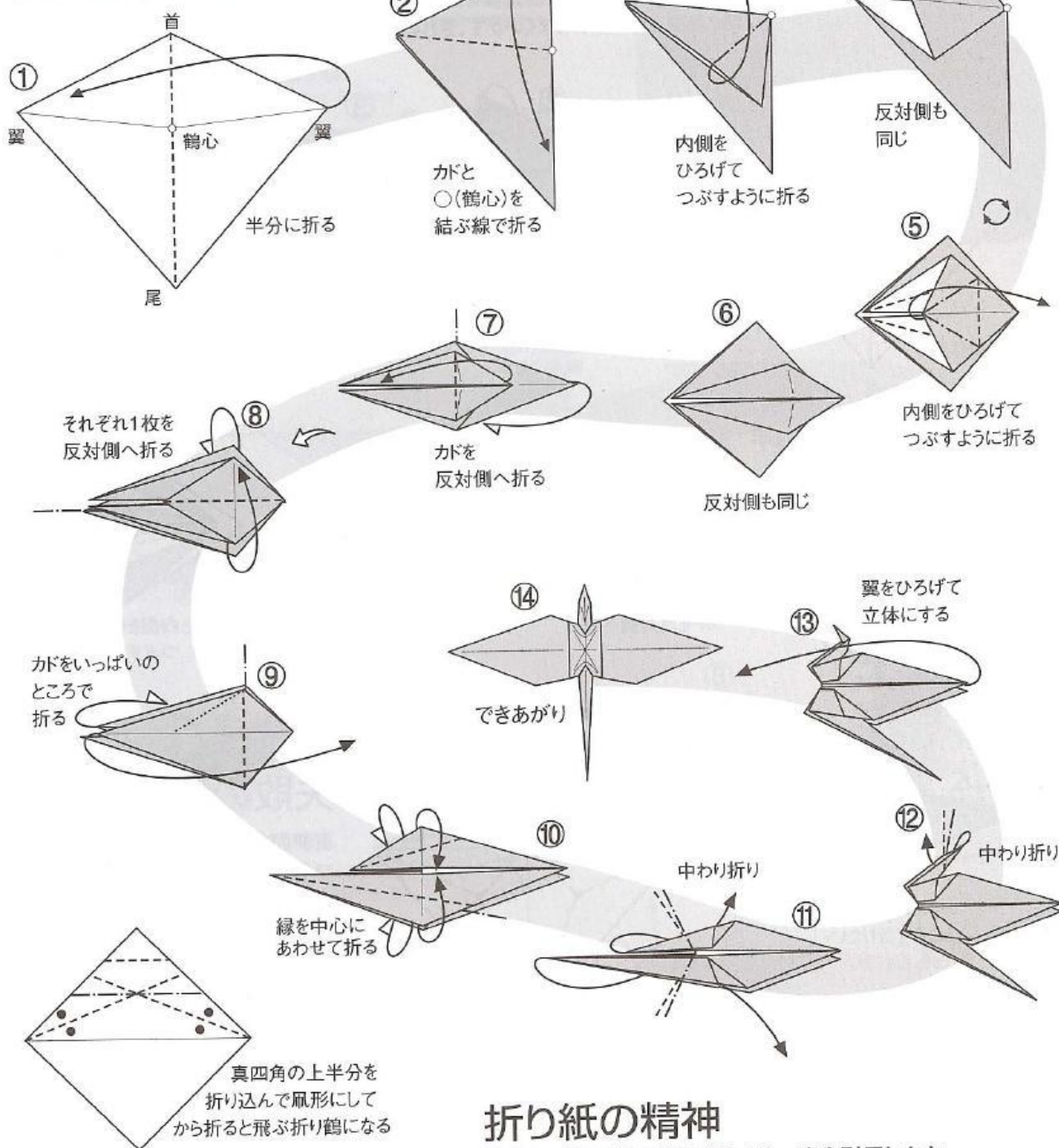


伏見鶴

凧形できれいに折るには、中心点(鶴心)を対角線の交点より下げた位置にとらなければなりません。そうその位置は図のような作図で決まります。鶴心が決まればあとは簡単。①②から先はこれまでと同じです。



伏見鶴の折り方



折り紙の精神

最後に、「折り紙の幾何学」から一文を引用します。

「もっとも、折り紙の専門家たちの多くは、真四角な紙から出発するのが折り紙の正統であって、長方形や三角形から出発するのは外道であり、異端であると考えられるけれども、折り紙の精神というものがあるとすれば、それは、出発してからは、はさみも、糊も使わないという制限の中で、どれだけのことができるかという点にあり、出発の紙の形にはこだわらない方がよいと思う。」

伏見康治先生 —夢を遺してくれた人—

Husimi Kodi -A Man with a Everlasting Dream-

伏見康治先生を偲ぶ

三浦 公亮

先生は、昔ある本の中で、日本人の創造性にかんして、日本人個々の創造性は相当あるけれども、それを日本の社会が認めていないことを嘆かれ、次のように述べられています。

「例えば、今日日本国民は日常的にテレビの厄介になっており、それで日常的に「八木アンテナ」に厄介になっているわけですから、八木先生の発明は大きな創造性であったというわけです。日本兵がマレー戦争で、イギリス軍の残した無線機の中に「ヤギアンテナ」と書かれた魚の骨のようなものを発見して、これは何だと不思議がったという話があります。これは日本の社会が日本人の独創性を評価できなかったということでしょうか。」(一部省略)

その対策として、先生の提案は、「百人の役人の中に一人くらいの割りで、創造性を早期に監督して、それを生んだ人物を育て上げてくれる人があるべきだと考えています。その人たちをわたしは、名馬の素質を早く発見するという意味で「博労」と呼びたいと思っています。」

先生は、ご自身、折り紙の数学の大博労でした。始めに、満枝夫人と共著で『折り紙の幾何学』を出版されました。これは、すでにこの方向に関心を持っていた人々を勇気付け、また新しい人々に魅力を伝えました。今日の状況からは想像できないことですが、あの時代に折り紙の数学をする人は、いわれない世間の蔑視を感じたものです。この本のおかげで、私どもは胸を張って馬を飼う、いや折り紙の創造、をできるようになりました。

次に先生が大きな影響をあたえたのは、弟子でもあるパドヴァの「驛馬」藤田文章先生が、折り紙の数学の国際会議を組織するように、陰ながら支援したことにあります。実際、この第1回の折り紙の数学会議は、多様な情報に満ち、また参加自体が楽

しみである、稀有の国際会議となり、現在もその系譜は引き継がれ、発展していることはご存知のことでしょう。

その頃、私自身は先生のお誘いを受けて、ミウラ折りについての講義をいたしました。それまでは、かたちの科学、折り紙の数学の問題として、話すという機会は全くなかったわけですから、初めて地方馬が中央のトラックを走らせていただいたわけです。これをきっかけに藤田先生からけしかけられ、第2回の折り紙の科学国際会議を、ご存知の名馬、布施、川崎、前川の諸氏のお力を借りて、大津で行うことになりました。先生には名誉会長として、満枝夫人と共に出席していただきました。

そこで先生が述べられたことは、「日本



第2回折り紙の科学国際会議で折り紙を楽しまれる伏見先生

固有の文化である折り紙が科学の領域に到達したことをよろこぶ。また長いこと、これを望んでいました。今日折り紙は世界中の人たちに愛されております。私が特に喜ばしいことは、単なる遊戯の世界を超えて、科学の高みに到達したこと。私は若い世代がこの運動に参加することを見たいのです。」

これは、まさに先生のご遺志でもあると思います。白山の山口厩舎にたむろする若い世代に、私自身も同じ期待をしております。

いつも見守ってくださった伏見先生

阿部 恒

私が伏見康治先生のお名前を初めて知ったのは、ジョージ・ガモフの名著『不思議の国のトムキンス』の記者としてでした。

二度目にそのお名前を聞いたのは、同じ理論物理学者の武谷三男先生からでした。戦中、特高警察に逮捕された武谷先生を、陰から支援された人達の一人として、湯川先生、朝永先生に続いて伏見先生のお名前を伺いました。

その後、私が日本折紙協会の事務局長として協会の運営に関わっていたとき、折り紙に深い理解を示していらした先生にお目にかかり、協会のシンポジウムには奥様の満枝先生にもご参加頂きました。

私が日本折紙協会を離れた後、当時参議院議員だった先生の計らいで、国際交流基金で、藤本修三さん、笠原邦彦さんと共にイタリアの折り紙会議に行かせて頂きました。これには、もう時効になるので今なら明かせる裏があります。

出発まで半月という頃、秘書の方から電

話があり「今回は予算の関係で二人まで、ということになってしまい、先生も困っていらっしゃる」とのことでした。「それなら、私が辞退すれば問題解決ですね」と言いますと「有り難うございます」と電話が切れました。

ところがその後、何事もなかったかのように三人で出発しました。後になって、これは先生が私の分を個人的に出して下さったのだと思いました。なぜなら、藤本さん笠原さんには文書による報告が要求されている(編注:国際交流基金で派遣された場合帰国後に報告書を提出することになっている。)のに、私は先生に口頭による報告だけで済んだからです。

池袋のサンシャインシティ展望台で、2000年に開催した私の折り紙作品展示とトークの会にもおいでくださり、本の出版も勧めてくださいました。そして、そのとき一緒に来場され、紹介して頂いた金子正久氏の尽力で「すごいぞ折り紙」を日本評論社から出すことができました。

伏見康治先生 —夢を遺してくれた人—

Husimi Kōji -A Man with a Everlasting Dream-

この他、先生には書ききれないくらい多くお世話になっているのですが、一番感激し、心に残っているのは、1980年に「数学セミナー」で折り紙の手法により任意の角の三等分が可能なことを発表した直後に頂いた電話です。そこで先生は「私は今まで折り紙の幾何学が初等幾何学と同じだと

いう先入観を持っていました。あなたはそれを見事に打ち砕いてくれました。このような先入観は創造的活動を妨げるものです」と言われました。私は感激する前にビックリしたというのが本当のところでした。その後、徐々に嬉しさがこみ上げ、このことが今のようない仕事をするキッカケになったのです。

伏見先生の思い出・黒姫山荘のことなど 布施知子

それは一本の電話からはじまった。伏見康治先生からで、「イタリアに行きなさい。教え子の藤田文章という男があなたに来てもらいたいと言っている」その旅が私にとって初めての海外で、世界に飛び出す扉となった。

その夏、黒姫高原にある伏見先生の山荘に招かれた。孫たちも来るから折り紙を教えてもらえればありがたい。途中で電話が満枝夫人にかわり、車は混むから列車でくるように。信濃大町駅からだと松本で乗り換えることになるが、接続時間が2分しかない。松本駅が大きいなら無理かもしれない、と細かく教えてくださった。実績も地位も名誉もある方が、一介の折り紙者になんという親切なお言葉だろう、と感動より先にあつけにとられた。先生は興味と好奇心を刺激することがが最上位にあった。山荘には2泊した。

伏見先生にお目にかかるのは個人的には初めといってよく、緊張したが、やがてお

孫さんたちもみえて、和やかに折り紙をした。周囲を散歩したときのこと。「ああセンノキですね」と私が木の名前をいうと、発音をしっかり確認され、「どういう意味なの?」と質問された。「ハリギリというのが正式な名前なのですが、センノキの意味はわかりません」と答えた。それから、いろいろ木や植物の名前をきかれた。私は答えられたり答えられなかったりした。話は飛ぶが、先生が国会議員をなさっているとき、藤田文章先生が来日なさって、東京のどこかを議員会館に向かって車で走っているとき、「ここはブラタナスの並木なんですね」と言う。「この道、何十回も走っているけど、そんなこと今まで考えてみた事もなかった」とびっくりされ、うれしそうにされた。先生の心はいつも柔らかかった。

お目にかかった一回一回にたくさんの思い出がある。受けっぱなしのご恩。温かいものがここに溢れる。折り紙の傍に先生がいっぱしゃることによってどんなに勇気づけられたことか。どうお礼を申し上げたらいいかわからない。本当に本当にありがとうございました。

2年ごとに銀座で開くタロ氏の個展にも、新橋の事務所からいつも歩いておいでくださった。次の言葉がタロ氏の一番印象に残っているようだ。

「君にライバルはいるのかい? ライバルは大切だよ」



▲上越科学館での折り紙展にて左からロバート・ラング氏、伏見満枝氏、布施知子氏、伏見康治先生

折紙探偵団コンベンション懇親会でスピーチされる先生



先生の愛した折り紙

川崎敏和

会合でお見かけする伏見先生は、つねに凛としたお姿で会場の中心にあった。学界・政界における先生の存在は私の測るところではないが、先生の折り紙研究には確かなものがあった。飛ぶ折り鶴の研究は、鶴心の発見をもたらした、折り鶴変形の扉を開いた。小命題の集合体に過ぎなかった先人の数理研究とは違っていた。本質を求め、頂から世界を俯瞰される姿勢は、余技の折り紙にも貫かれていたのである。

奇しくも、先生が他界されたその年に、折り紙の学術雑誌発刊の準備が進められている。伏見先生の愛した折り紙の本質は何か? 折り紙は何をすべきか? 我々は先生から学ばなければならない。折り紙を社会で活かすために、私は今、先生の声・偉大な先達の声に耳をそばだてている。

合掌。





折紙探偵団懇親会で左から前川淳氏、山口真氏、伏見満枝、康治、大妻、大橋皓也、日本折紙協会常任理事(現理事長)、岡村昌夫、日本折紙学会顧問

伏見先生からの贈りもの

西川 誠司

私が伏見先生とはじめてお会いしたのは、1992年8月のロバート・ラング氏初来日の折り、折紙探偵団の折紙展が行われていた上越科学館へ向かい、お近くで避暑されていた伏見先生を、ラング氏が訪問するという旅程に同行した時ですから、16年前のことになります。伏見先生は既に80歳を越えられていましたが、最新の折り紙設計の進歩に常に新鮮な関心を寄せられていました。第2回折紙探偵団コンベンションの懇親会では、ご夫婦で参加され、快くご挨拶を引き受けていただきました。ボランティアの折紙探偵団は経済的に苦しくろうと、公的な補助金の紹介にも心を砕いていただきました。

折紙探偵団新聞45号への特別寄稿や、第6回折紙探偵団コンベンションでのご講演は、得難い贈り物でした。本当に若い

世代へ常にエールを送って下さいました。

1994年に大津で開かれた「第2回折り紙の科学国際会議」での開会に寄せたご講演は深く心に刻まれるものでした。

最後に Proceedings of Second International Meeting of Origami Science and Scientific Origami (1997)への寄稿文から一文を引用し、噛み締めながらご冥福をお祈りしたいと思います。

「Today Origami is loved by people all over the world. But I am especially pleased by the fact that it has been exalted to the height of science, going beyond the realm of simple amusement, and I am delighted to see the younger generation carrying on the movement.」(Kodi Husimi)

周りを気にかけて温かな方でした

山口 真

初めてお会いしたとき、先生は満枝夫人とご一緒であった。第2回折り紙の科学国際会議の会場であった。奥様をいたわるお姿は微笑ましく、美しいものを見るようでした。

先生は探偵団をよく理解してくださり、名称が日本折紙学会になってからは名誉顧問にもなっていました。何度か機会があり、折紙探偵団コンベンション、忘年会などにも気さくに参加してくださいました。11年程前に、先生のお住まいになっているマンションの自治会の依頼で「小さな折紙展」をしてほしいというお話があり、お手伝いさせていただきました。アットホームな雰囲気の会場では折紙教室も開かれ、とても喜んでいただいたことは昨日のようです。この時にお礼をと言ったくださったのを辞退し、代わりに(失礼)折紙探偵団新聞45号に寄稿して

頂いたことは何よりの喜びでした。

いつの日からか、毎年心ばかりの静岡茶(妻が静岡なもので)を送るようになっていたのですが、必ず直筆の礼状が来て、今、手元に宝物として大切に保管しています。今年いただいた礼状が最後になってしまったのは、とても寂しい気持ちです。

先生のお宅には何度かお邪魔させていただきました。そのときに、先生の趣味の一つが「卵の形をした物の収集」であるということを知りました。あるとき、サンフランシスコの街でカレイドスコープ専門店のお店があり、卵の形をしたカレイドスコープを見つけました。早速お土産にして届けました。そのとき満枝夫人が入れてくださった美味しい紅茶の味は、今も強く記憶



▲折紙探偵団での座談会に気さくにに応じてくださった伏見先生(右端)。ロバート・ラング氏、西川誠司氏、布施知子氏らと(上越科学館で)



▲折紙探偵団コンベンションの懇親会で歓談されるご夫妻。中央は真下日本折紙協会常任理事



▲「小さな折紙展」にてご夫妻と。中央は山口真氏

▼「小さな折紙展」にて。伏見先生を囲むご家族と山口真氏親子



に残っています。

先生が常に気にかけてくださった日本折紙学会からは、力ある若手が次から次に生まれ育ってきています。私も次の世代へ少しでもよい形を残していけたらと思っています。

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

前川 淳 Maekawa Jun

8 冊目『折り紙の幾何学』 伏見康治 伏見満枝著

"Geometry of Origami" by Husimi Kōji and Husimi Mitue

まずは、本の紹介というより、個人的な話を書かせていただく。

昨秋、我が家のポストに、手作りの封筒に味のある文字が書かれた一通の封書が届いた。伏見康治先生からの手紙だった。拙著『本格折り紙』を送ったことに対する返礼で、これが、先生からいただいた最後の手紙になった。

「(わたしの)折紙熱は亡妻の存在に基づくものでしたから、彼女亡きあとは段々さめてきましたが、貴著を頂いてまた燃え上がる」と期待しています」

99歳になる伏見先生の、折り紙への情熱が復活するかもしれないと思わせる文面が、うれしかった。じっさい、伏見先生は、亡くなられる直前まで、明晰な頭脳と旺盛な好奇心を持ち、新しいアイデアを生み続けたひとだった。それはまさに超人的なもので、わたしはひそかに「不死身先生」と呼んでいた。

しかし、あらためて手紙を読み直すと、これはつまり、わたしを励ます手紙なのでもあった。先生は、ひとをその気にさせる名人でもあった。同列に扱うのはおこがましいが、南部陽一郎氏や戸田盛和氏の

ような大物理学者もそうして励まされた思い出を語っている。友人の造形作家・日詰明男さんも、訃報の翌日、メールにこう書いてきた。

「本当に伏見さんほど大きな視野をもたれた方を私は知りません。千里眼の持ち主だったと思います。伏見さんからいただいた言葉は僕にとって何よりの宝です。数え切れないほど多くの人が伏見さんから鼓舞されたことでしょう。物理学や数学の進歩発展を本当の意味で支えられた人でした。」

戸田盛和氏によれば、伏見先生は、「学界の口さがない人達の中には、物理学者を数学のできる順にランクすれば、伏見・朝永・湯川の順になるだろうなどという人もいる」(『伏見康治著作集2』解説)とも評されていた偉才であった。また、原子力に関して、平和利用という考えを磐とし、わたしがやらねば誰がやるということもあったのか、政治の世界にも臆することなく足を踏み入れた行動のひとつでもあった。なんというか、能力も資質も別の世界にあるひとだった。一方、ほんとうに飾らない人柄で、M・C・エッシャー

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<http://www.origami.gr.jp/Libra/>にアクセスしてください。

のような好奇心のありようが、伏見満枝さんという、これまたきわめて魅力的な個性のあるひととともにつくった本、それが、『折り紙の幾何学』なのである。

折り紙はそもそも幾何学的な側面を持っている。本連載でも取り上げられた『Geometric Exercises in Paper Folding』(折り紙による幾何演習)(T. Sundara Row 1893)や、藤本修三さんの先駆的な成果など、折り紙と幾何学を結びつける優れた業績はそれまでにもあった。しかし、このふたつが分ち難く結びついていることを、本格的に示したものとしては、1979年7月に日本評論社から刊行された、この『折り紙の幾何学』こそが、やはり一番にあげるべき一冊である。

70年代末というこの時期、いわゆるユニット折り紙も産声をあげたばかりで、多面体と折り紙の結びつき自体が新鮮だった。折り紙による正確な作図に関してきちんと考えているひとほとんどいなかった。折り目に対する幾何学的解析も見当たらなかった。それらに触れたこの本は、ほんとうに新しい内容が詰まった本だった。

その内容というのは、雑誌『数学セミナー』に不定期に掲載された記事をまとめたものである。7つの章(後述)で構成され、基本的には雑誌掲載記事そのままの再掲になっている。それゆえ、あとがきにもあるように「思考模索の文章」なのだが、そこそこ面白いと言える。折り紙であるから、その「模索」には「手」のはたらきも加わっている。次のように書かれているとおりだ。

「さて、折り鶴に託して、ひとつの幾何の定理の発見物語りをやや詳しく述べさせていただいたが、こんなにくだくだしく述べたのは、新しい発見をする段階のひとつ



増補新版(84.11)の表紙と、初版(79.7)の裏表紙。装丁は杉浦康平氏

の版画や紋様への嗜好など、わたしの関心にぴたりと重なるものもあり、「ほくは若いころ、絵描きになりたいなと思っていたんだもの」(『美の幾何学』)といった言葉に共感できるひとだった。そうした「美の幾何学」を追い求める、子ども

○まえかわ・じゅん 折紙創作・研究家。折鶴モノのコレクター。東京生まれで東京在住だが、1年の約1/3は、天文台の仕事のため長野・山梨で過ごす。好きなもの：阪神タイガース、星空、書店、喫茶店、幾何学的調和。

つの雛形をここに見ることができるように思うからである。わたくしたちはもちろん全く抽象の世界の中で、論理的推論だけで新しい真理をみつけることができるだろう。しかし多くの場合真理は頭で見つかるよりは、「手」でみつかるものなのである。」(P.113)

別の言いかたをすれば、この本は、堅牢な建築物なのではなく、さらなる発展のヒント、あるいは挑戦すべき課題にあふれた、旅の記録である。わたし自身、この本で提示された「片面性」という概念を考察して、伏見先生が見落とされていた折り鶴の変形を思いついた。折り目の山と谷に関する定理を発見したのも、この本に接した後だったと記憶している。

阿部恒さんも、この本に大胆に挑んだひとである。同氏による、折り紙による任意の角の3等分(『数学セミナー』80年7月号)は、次の文章への挑戦と言えなくもない。

「初等幾何学作図法と折り紙の手法は完全に一致しているように思われる。これに関して言えば、任意の角の3等分を折り紙の世界でも許すべきではないと思う」(p.96)

漸近法による任意の角の3等分を指した言葉なのだが、阿部さんは、「一致しているように思われる」の「思われる」を検討し、初等幾何学の定規とコンパスという作図法とは一致しないが、折り紙としては無理のない手法が想定可能だったことを示した。

この記述は、5年後の増補新版(84年11月)でもそのままになっている。これは、伏見先生が阿部さんの業績を認めていなかったからなのではない。大いに評価されていたし、「思考模索」をそのまま残すという、この本のつくりによるもので

ある。なにより、この本には、論点を整理し、新しいものを生み出す力があつた。

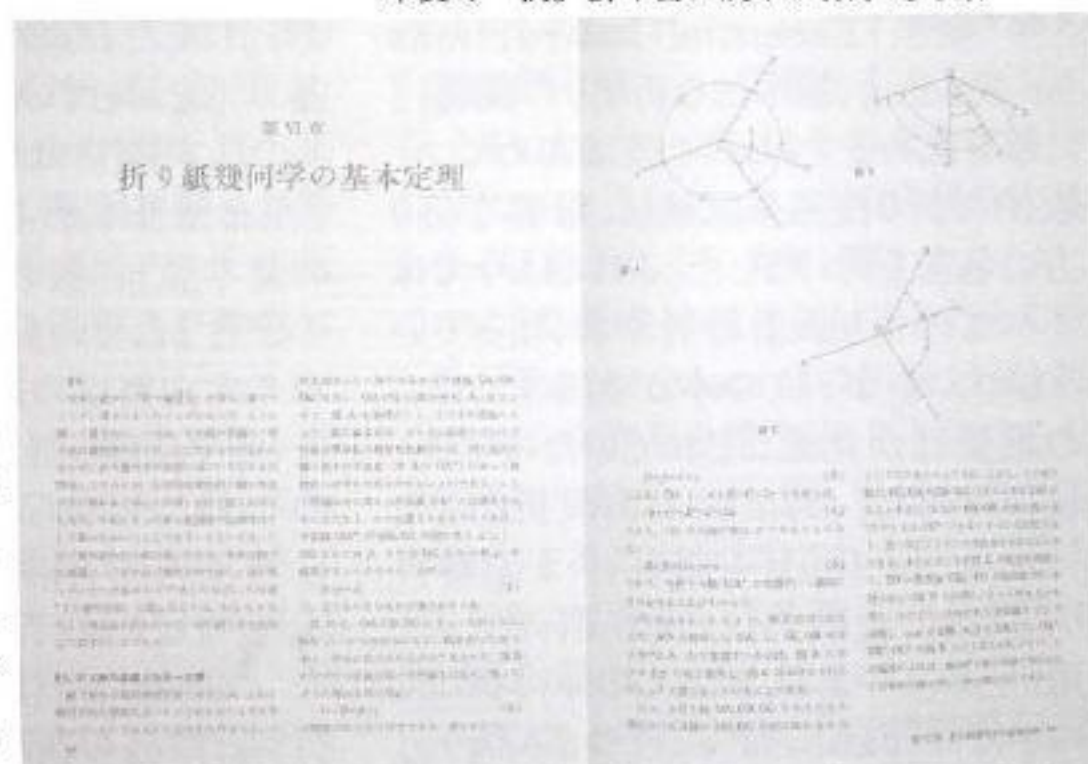
冒頭に引用した手紙にもあるように、伏見先生の折り紙研究は、満枝夫人との共同作業であつた。以下に、各章の題と、雑誌初出の年月、発表時の著者名を示すが(K=康治、M=満枝)、たとえば「たとう紙の幾何」は、満枝夫人の単独著作になっている。

- I. 正多面体を折り紙で作ろう(75年3月 by K&M)
- II. 正多面体を折り紙で作ろう 後日談(75年7月 by K&M)
- III. 正多面体を折り紙で作ろう 続続篇 正五角形を折り紙で作ろう(75年8月 by K&M)
- IV. たとう紙の幾何(77年3月 by M)
- V. 折り鶴変化 折り紙の幾何学のすゝめ(76年12月 by K)
- VI. 折り紙の幾何学の基本定理(77年4月 by K)
- VII. 折り鶴変化の決定版 新しい幾何の定理の発見(77年7月 by K)
- VIII. 折り鶴変化・再論 前川淳さんの変化折り(81年11月 by K)
- IX. 「飛ぶ鶴」の首が伸びた(84年6月 by K)

VIII章とIX章は、増補新版で加わったものだ。またもや私事で恐縮だが、これはわたしの誇りでもある。

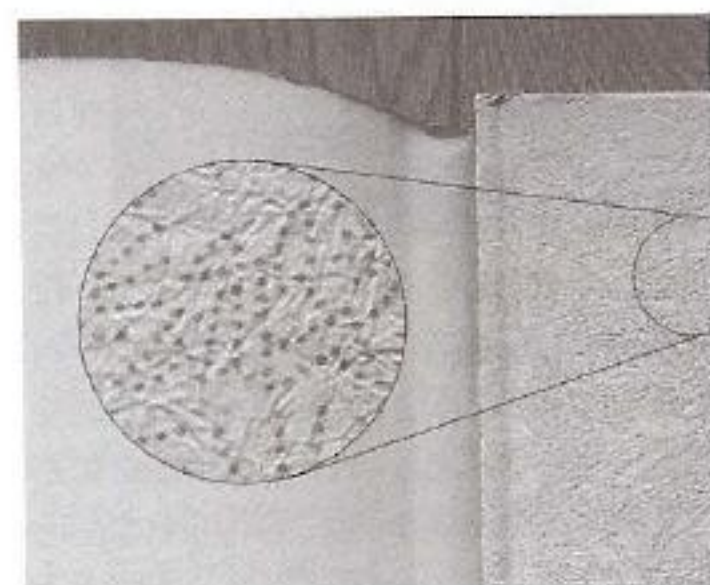
ひとは先人から受けた恩をそのひとは返せない、という説を聞いたことがあ

本文の一例。折り目に関する数学的考察



る。たしかにそうかもしれない。ではどうするのか。それは、次の世代に「返す」のだそうだ。今回この本を読み直して、そんなことを思った。

最後に、小さな発見を披露しよう。この本は、杉浦康平氏による装丁も素晴らしいのだが、これに気がついているひとは少ないと思う。カバーを外した表紙の、一見してランダムな点の中に、折り鶴の絵が隠れているのである。発見は、どんなところにもある。こんな小さな発見も、折り紙の幾何定理の発見も、科学の大法則の発見も、そのよこびはどこかでつながっている。



表紙の隠し絵。折り鶴が見える

過去の折り紙に学ぶ 第8回

Learning from the Paperfolding of the Past

デビッド・リスター
Writer: David Lister

訳: 羽鳥公士郎
Translator: Hatori Koshiro

ロバート・ハービン著『Paper Magic』について・後編

A Commentary on "Paper Magic" by Robert Harbin. Part Two.

ハービンは、折り紙の歴史の概観に続き、「Essential Instructions for Folding(基本的な折り方の説明)」に筆を進めます。ここで彼は初めて、一般的な折り技法を記述し、重要な折り方に名前を付けました。これらは今ではすべての折り紙愛好者がよく知っているものですが、彼の本が出るまではこの重要性が見過ごされていたのです。彼の付けた「crimp(両面段折り)」や「reverse fold(中割り折り・かぶせ折り)」といった名称は、現在西洋で広く用いられています。また、この本の折り図の中には「rabbit's ear(つまみ折り)」という記述も見えます。これらの用語は、『Paper Magic』そのものとともアメリカのリリアン・オープンハイマーに伝わり、彼女が1958年にOrigami Centerをつくったときに、自然に受け入れられました。そして、サミュエル・ランドレットが(ハービンと協力して)1961年に『The Art of Origami』の中で折り技法を体系化したときにも、これらの用語が採用されました。



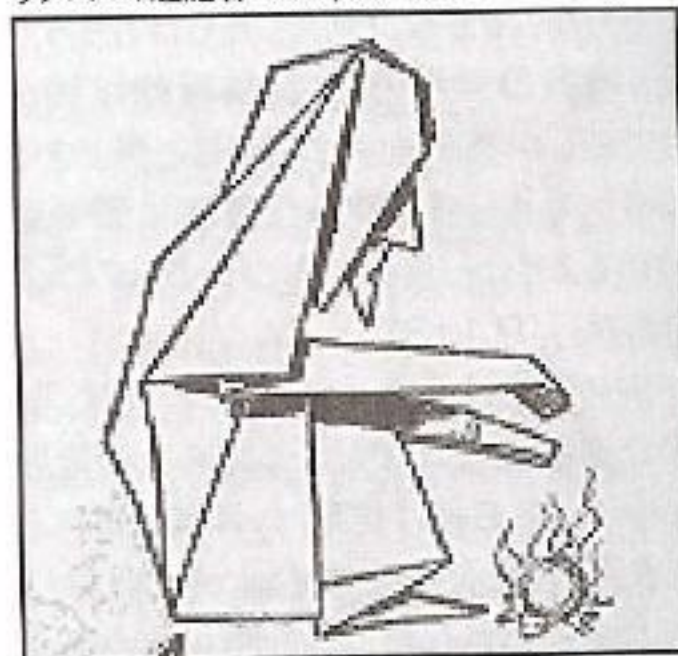
リリアン・オープンハイマー

マーガレット・キャンベルは「Foundation Folds(基本折り)」という名でいくつかの基本的な折り方を特定していましたが、この概念は彼女が本を書いているあいだに形作られていったもののようです。ハービンはこの考えをさらに推し進め、「basic folds」という名

に改めました。これは今日の「base(基本形)」にあたるものです。ハービンは6つの基本形を示していますが、これはキャンベルの基本折りとは異なっており、現在では「座布団基本形」、「正方基本形」、「鶴の基本形」、「蛙の基本形」と呼ばれるものが含まれています。この体系は、吉澤章や内山興正の基本形の体系とはまったく独立に導き出されたもので(そのころのハービンは彼らの体系を知りませんでした)、どちらの体系とも異なっています。

ハービンは、「Introduction to Folding(はじめに)」に続けて、折り紙作品の折り方を紹介します。作品は実にさまざまで、多くは西洋で古くから伝承されていたものでした。そのほかに日本の伝承作品もあり、キャンベルの『Paper Toy Making』と共通するものもあります。それに加えて、ハービンが考案した作品も多く含まれています。吉澤の提唱した「創作折り紙」の概念にハービンも追随したのでした。ロルフ・ハリスも同じ熱意をもって、独自の作品を創作しています。その多くは特別な形に切られた長方形を組み合わせたものです。1つの章が紙幣折りにあてられており、ここでは多くの場合米国のドル紙幣が使われています。この新しい折り紙の伝統は、通常の折り紙とは独立に、第二次大戦以来米国で発展していました。ハービンはまた、「スフィンクス」や「テーブル」など、フェリサ・デ・ウナムノから送られたスペインの作品もいくつか収録しています。最後に、ウナムノの追随者による2種類のムーア人が収録されており、ハービンは、それまでに創作された折り紙作品の中で最も素晴らしい作品だと述べています。確かに、シンプルでありながらよくできた作品です。しかし、そのような作品も、『Paper Magic』が大いに刺激した折り紙技法の輝かしい発展によって、すぐ

"Moor at the Fireside" by a follower of Unamuno
ウナムノの追随者による「火にあたるムーア人」



に乗り越えられてしまうことになります。興味深いことに、ハービンはウナムノ自身の作品をこの本に含めていません。

『Paper Magic』には、日本と西洋のよく知られている古典作品のほとんどが含まれています。日本の作品としては、「兜(Martian Helmet:軍用兜)」、「足つき三方(おかしな訳ですがKitchen Sink:台所の流し台)」、「重ね箱(Ash Tray:灰皿)」、そして「折鶴(Stork:コウノトリ)」があります。「Chinese Junk(中国のジャンク船)」は宝船とほぼ同じですが、舳先と艀がどちらもとがっていません。しかし、紙幣折り紙の中に、片方の端だけがとがった「Treasure Ship(宝船)」があります。ハービンはまた、彼自身が宝船をアレンジした「バックル」と、レグマンの「かんぬき」も収録しています。これらはシンプルですが、折るのは楽しいものです。完成形は同一ですが、工程はまったく違っています。

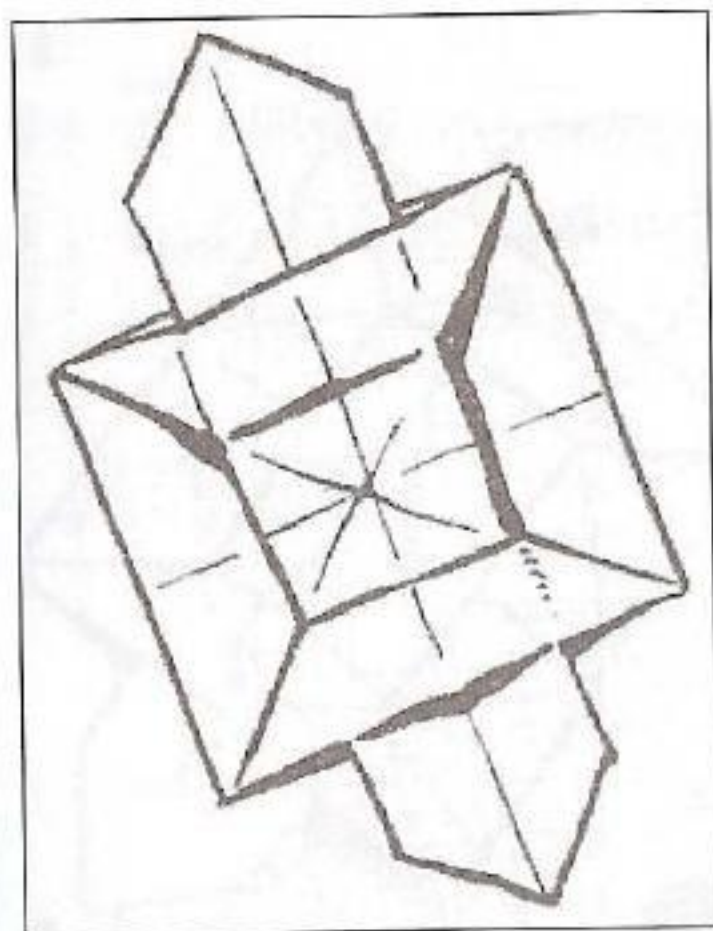
西洋でよく知られていた折り紙としては、「塩入れ」、「スーツ」、「豚」、「恋結び」などがあります。もっとも興味深い作品は蝶ネクタイです。この作品の起源は分かっていません。私はこれを日本の資料で見たことがありませんが、だからといって日本で知られていなかった

○David Lister(デビッド・リスター)=1930年生まれ。5才のときに父親などから折り紙を習い、それ以来興味をもつ。1953年ごろから本格的に折り紙の研究を始める。British Origami Societyの創設にも尽力し、1998年から2002年まで会長を務める。現在はBOSの副会長。



とは言えません。ガーション・レグマンは、この作品を「蓮」として知っており、東南アジアから伝わったものだと考えていました。工程の最後に広げるところを、蓮の花が広がるのに見立てたということです。これは、折るのも折り図に描くのも簡単な作品ではありませんが、ハリスの折り図は非常に見やすく描かれています。他に2つ興味深い作品として、「象」と「荷かごを背負ったラバ」があります。どちらも鶴の基本形から折られています。これらをハービンに教えたのはアルフレード・ペストールで、彼はスイスの女性からこれらを教えてもらい、もともとは南アメリカから伝わったものだと考えていました。本当の起源はまだ確かめられていませんが、ピセンテ・ソルザノの作品であるとしてもおかしくありません。

次に、特殊な形の紙を使うロルフ・ハリスの作品が続きます。これはあまりよい作品とは言えないかもしれませんが、ある種の創作折り紙であることには



Robert Harbin's "Buckle" and Gershon Legman's "Bar and Bolt"
ロバート・ハービンの「バックル」とガーション・レグマンの「かんぬき」

違いありません。

ハービンは4ページを割いて紙幣折り紙を紹介しています。恋結びを応用した「蝶ネクタイ」、何種類かの指輪、そしてもっとも印象的なのは、尾羽を畳んだ優雅な「孔雀」で、1956年当時の5ポンド紙幣で折ると、装飾的な渦巻きが非常に効果的です。

『Paper Magic』には、比較的短い参考文献一覧が含まれています。主に英語(イギリスおよびアメリカ)の本ですが、スペイン語の本も多くを占めます。その中には、ウナムノについての本や記事と、ソルザノ=サグレドの本のリストがあります。日本語の本は含まれていません。短いリストとはいえ、当時の北ヨーロッパと北アメリカでは知られていなかったスペインの折り紙の伝統について、さらに探求するための道筋を示していました。数年後には、吉澤の点線と矢印による表記法が西洋で受け入れられ、世界の折り紙界が統一されたので、西洋の折り紙愛好家たちは日本語の折り紙の本も熱心に探すようになります。文章はまったく解読できませんが、折り図だけを求めたのです。

それまで、北ヨーロッパ、北アメリカ、スペイン、アルゼンチン、そして日本の折り紙は、ほぼ孤立して発展しており、それらの地域間での交流はほとんどありませんでした。1950年代、世界全体で独立して折り紙の復興が起こり、離れた地域間の連携が少しずつ形作られてゆきます。その中で、『Paper Magic』は、世界で初めてさまざまな折り紙の伝統を1冊の本にまとめ、折り紙を統一された芸術として提示したのです。

『Paper Magic』の登場は、吉澤の作品を収録するにはわずかに早すぎました。レグマンは吉澤の作品をよく知っていましたが、彼自身は優れた折り手ではなく、折り図も描かなかったため、吉澤

の作品をハービンに伝えることはできませんでした。それでも、レグマンは吉澤の「創作折り紙」という概念をハービンに伝えました。ハービンはその考えに熱中し、『Paper Magic』には彼自身の作品も多く収録されています。驚いたことに、このような概念は西洋にはありませんでした。『Paper Magic』の出版以降、折り紙は伝承作品を繰り返し折り続けるだけのものではなく、新しい折り紙作品を創作することが期待されるようになります。これは1960年代の西洋の折り紙に大きな影響を与えました。

ロルフ・ハリスは熱心な折り紙愛好家ではありませんでしたが、『Paper Magic』に対する彼の貢献は、この本の成功に中心的な役割を果たしました。彼の手書きの折り図は非常に分かりやすく、本全体が生き生きとしていました。しかし、ハリスに匹敵するほど優れたイラストレーターはまれです。彼のような表記法は複雑な作品には向きません。1960年代、吉澤の点線と矢印の表記法によって、分かりやすい折り図を容易に作成できるようになり、これが折り紙の急速な普及に大きな役割を果たしました。

『Paper Magic』は、イギリスとアメリカにおける折り紙革命を促進しました。この役割は、吉澤の表記法とハービンの基本形や折り技法の名前とを組み合わせ、ハービンの後の本やランドレットの本に受け継がれます。しかし、『Paper Magic』はその後40年間ペーパーバックとして出版され続け、現在でも初心者向けの優れた本であり続けています。折り紙が発展してゆくにつれ、『Paper Magic』は折り紙を先導する本としての地位を失ってゆきますが、折り紙がそれまでに歩んできた道を総括し、折り紙の歩むべき道を指し示したという点で、この本は折り紙の歴史の転換点における記念碑と言えるでしょう。

折線雑考

A Long Excursus on Crease Lines

目黒俊幸 Meguro Toshiyuki

第1回

折線はひとりでは変わらない

Crease lines won't fold themselves.

今回から「折線雑考」という記事を隔号で連載させていただくことになった。最近インターネット全盛で、自分もホームページの掲示板などにいろいろなことを書いている。ネットは即時性もあり非常に便利だが、その情報は、コンピュータが壊れたらなくなってしまう。それに比べると紙媒体の安定性という利点はやはり大きい(この文章を書いているうちに、自分のホームページの掲示板がまた吹っ飛んだらしい。なんてこった)。まずは連載の機会を与えていただいた折紙学会の皆様に感謝いたします。

本連載では紙を折ることにまつわるいろいろなことを書き綴っていきたいと思う。今回は1回目なので、折紙創作法の根源原理やそれに関する雑感を書いていきたい。

折紙創作法と一口にいっても、実際はいろいろな創作方法がある。たとえば、実際に折ってトライ&エラーでなにかの形をつくっていく方法や各種の折り紙設計方法などがある。それぞれの創作法には特有の方法論やノウハウがあったりするので、それにとまって色々な法則や概念が知られてきた。困ったことに、一つの創作法で便利な法則や概念が他の創作法でも有効とは限らなかったりする。例えば円領域分子法では非常に便利な一値性という概念は、面配置法ではあまり使い道がない。(文中の耳慣れない折紙用語は、ただの例としてあげているだけなので、適当に読み飛ばされたい。)

➤のように、創作法が変わるごとに基本になる法則や概念が変わるのは面倒なので、単純な原理に基づいて全ての創作法を理解するほうが良い。

以下でその話をしていきたいのだが、その前に次に述べる前提を確認しておきたい。

(前提)

「折紙造形は部分構造と部分構造を組

み合わせて作るか、部分構造を順次拡大して作る。」

これは折紙に限らず物をつくる作業ならなんでもそう。どんな造形作業でも人間が操る道具が瞬間に実行できる作業量は有限→それ以上の情報量を持つ造形を作るなら、瞬間に全体を作ることとは不可能→必ず部分構造を経る。というわけだ。折紙において人間が操る道具は主に手であり、ほとんどの折紙作品は手が瞬間に実行できる作業量以上の情報量を持つので、当然ながら折紙作品は部分構造を経て作られる。

折紙設計では創作の際に紙を折らずに展開図を描いたり頭の中で想像する場合もある。この場合も、人間が瞬間に展開図を描いたり想像したり出来る情報量は有限→それ以上の情報量を持つ作品を作るなら、瞬間に全体を創作することは不可能→必ず部分構造を経る。というわけで、どっちにしても折紙創作は部分構造を経て作られる。

➤の前提を認めたうえで、本題に入ろう。「全ての折紙創作法を理解する基本となる単純な原理」は以下のようなものである。

(折紙創作原理)「折り手が何もしなければ、折紙創作の時間経過内に折線が自発的に変化することはない」。以下で

補足してみる。折紙に限らず人間が行う造形活動では「構造が時間経過に伴って形成される」。一方、自然の摂理として、「構造は時間経過に伴って壊れていく」。「人間が構造を形成する速度」が「自然が構造を破壊する速度」より早い場合に作品が出来る。折紙では通常は「人間が構造を形成する速度」の方がずっと早い。だから自然による自発的な構造破壊は無視できる。これが上述の原理の意味である。このことから「折紙において部分構造を経て全体構造を作る場合、部分構造をこわす操作を創作者がしなければ、部分構造はそのままの形で全体構造の一部となる。」のだ。そういうわけなので、折紙で部分構造を壊す操作を避けながらそれらを寄せ集めていけば、部分構造をそのまま寄せ集めた造形ができるのである。ここで、「部分構造を壊す操

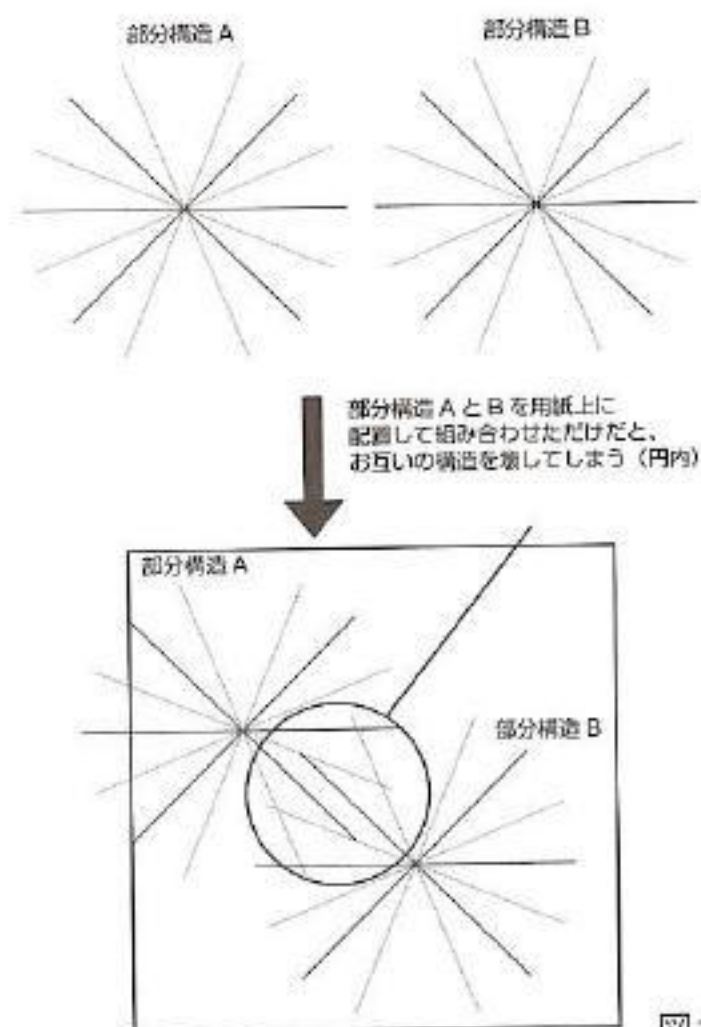


図1

目黒俊幸（めぐろ・としゆき）＝
1965年生まれ。24才から本格的に
折紙を始める。代表作は円領域分子
法、横分子蛇腹法、面配置法など。
近年のテーマは萌顔の折り方。



作を避けながら”という文句が大事なところである。

例 えば、この文句を無視して展開図上で部分構造を適当に組み合わせ、各部分構造から出てくる折線をそのまま延長させたりすれば、それらの折線は他の部分構造を変形させてしまう(図1)。紙という連続した素材を、途中で消す事が出来ない折線で造形していく折紙(特に二次元に折りたたまれる場合)では部分構造の影響ははるか遠方まで及ぶ。また上述の前提の通り折紙創作では部分構造同士を組み合わせる操作をすることが必然である。

だから折紙創作では必然的に部分構造同士の干渉の問題が生じやすい。部分構造同士の干渉がモロに生じると、部分構造同士が壊し合う事になるから創作が進まなくなってしまう。折紙創作上の制約の大きな部分はこの部分構造同士の干渉の問題が占めると言えよう。こう

いったわけだから、折紙創作においては「干渉による部分構造同士の壊し合いを避けながら、いかにして部分構造を組み合わせるか」ということが根源的な問題になる。

そんなこんなで、各種の創作法というのは、どうやって部分構造同士の壊し合いを避けているかということで特徴付けられたりするのだった。このことを折紙設計的な言葉を使って言いかえれば、部分構造とは折紙分子のことなので、「各種の創作法は、分子同士の接続方式によって系統化できる」ということになる(図2)。ここで、「部分構造を壊す操作を避ける」ということは最低限どれほど手間がかかるか」調べてみることは大変興味深い。この手間がゼロならば、すなわち折紙創作において何の工夫もせずに部分構造同士を寄せ集めても部分構造同士が壊し合いを起こさないならば、折紙でも粘土細工のように自由に制約のない造形がいくらでもできるだろう。しかし折紙創作を試みたことがある人なら骨身にしみていると思うが、この手間がゼロということはない。

例として円領域分子法という創作法を取り上げてみよう。円領域分子法では部分構造同士が深刻な壊し合いを起こすことはないという便利な特徴があるが、そのためには創作時に円領域分子法のルールを守る必要がある。円領域分子法のルールとは「横分子が一値性をもつ」とか「接する円領域同士の中心を直線で結び縦分子にする」などである。

円領域分子法の使い手は表面上「部分構造同士の壊し合い」を意識することはないが、円領域分子法のルールは守

らなくてはならない。そして「円領域分子法のルールを守るという手間」の大部分は「部分構造同士が壊し合いを起こさないようにするための手間」である。こんなことを考えていくと、「部分構造同士が壊し合いを起こさないようにするための手間」は結構大変そうに思えてくるかもしれない。

しかしここが重要な点なのだが、実際には「この手間」は基本的方法を用いれば軽微なものですむ。これは円領域分子法で考えた場合と矛盾するようだが、円領域分子法の場合はよりスムーズに創作が出来るよう工夫がされているので、そのために色々な条件が組み込まれているというだけの話である。

ここで以下のことを強調しておきたい。折紙創作において部分構造同士を壊さずに組み合わせることは、全くのフリーと言うわけにはいかないにせよ、軽微な手間で見現できるのだから、折紙創作でも部分構造を積み重ねて全体構造を作るという造形手法の王道は実現できるのである。

そういう意味で、折紙の造形力は一般的に思われているより遥かに強力である。それは「樹状の構造図を描いてその枝分かれとが配置を持つ基本形が折れますよ」というレベルではない。面で構成された部分構造を好きなように集積して全体構造を構成できるという無限の表現精度を持つレベルにあるのである。

今回は「部分構造同士の壊し合いを起こさない基本的な接続方法」を具体的にみて、それから各種折紙創作法がどのように発展しているのか調べていきたいと思う。

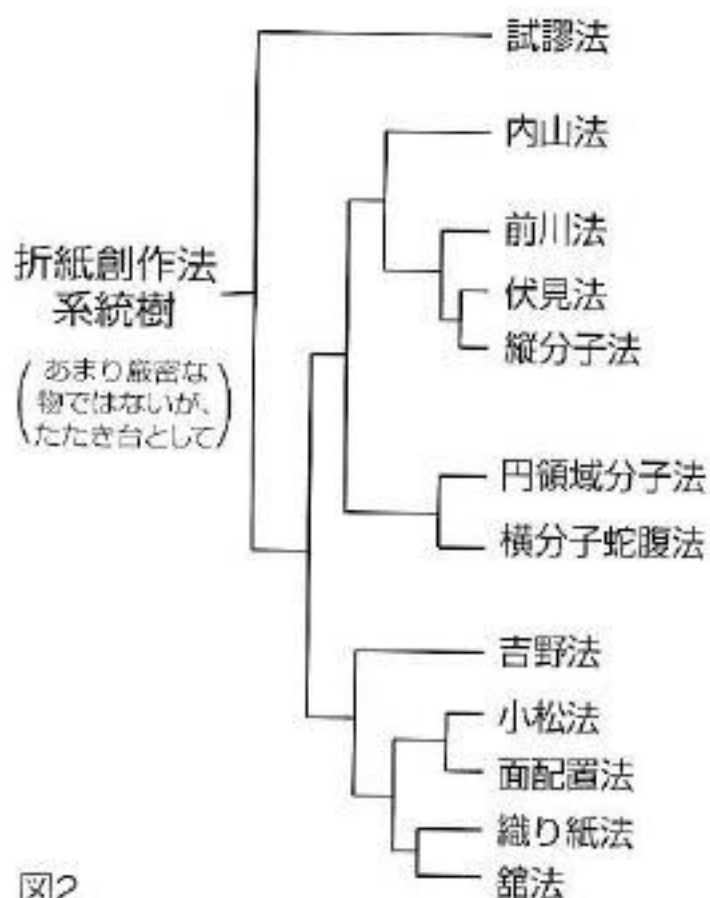


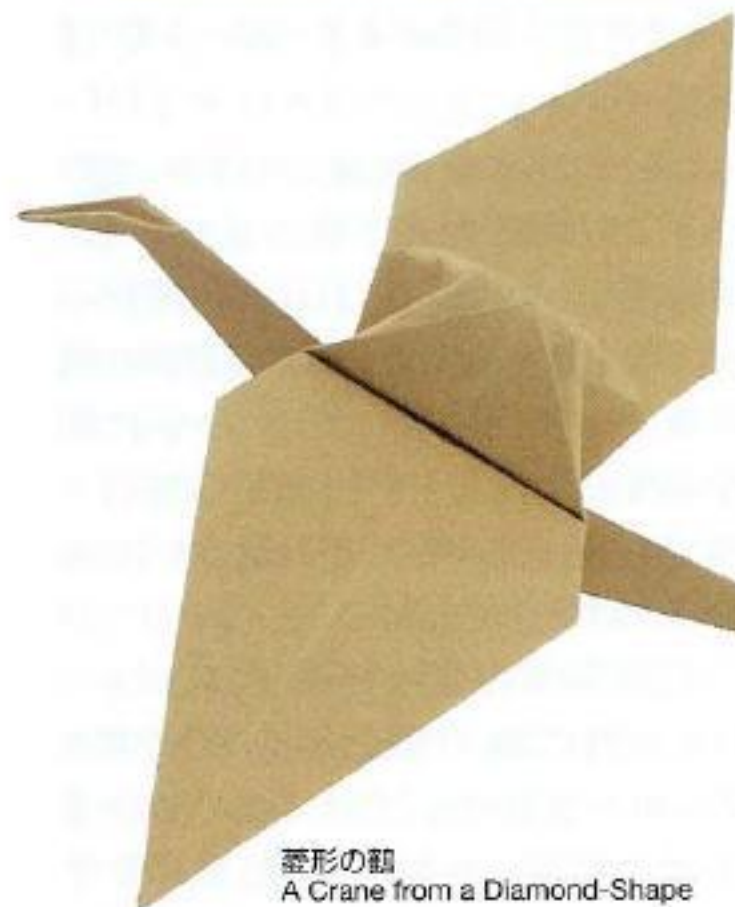
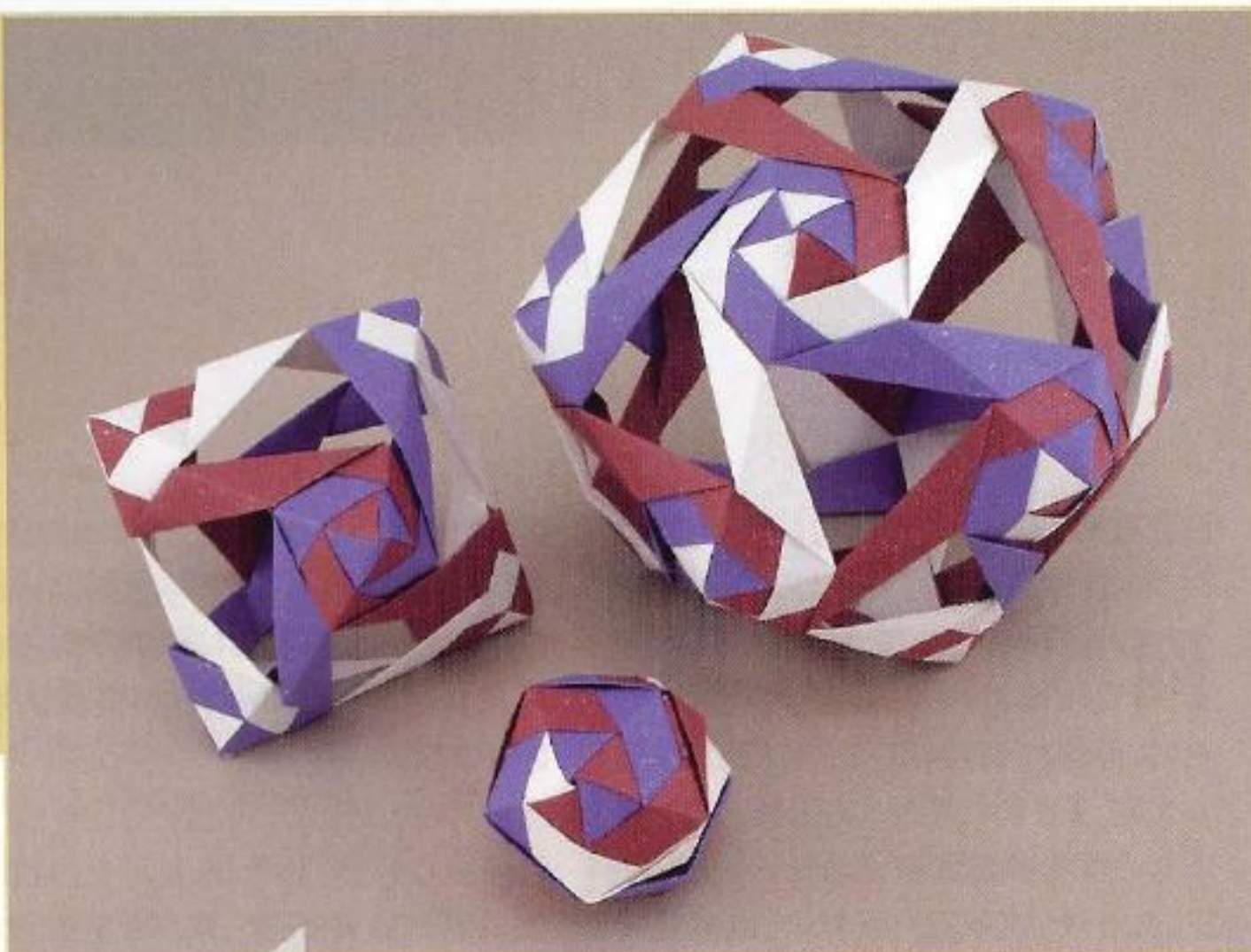
図2

■次々に新しい人材が登場する世界各地のコンベンション。ニューヨークのハイテンションを一段落させずに、そのまま保ち続けて東京コンベンションになだれ込むのも一興？

「シェルユニット：正二十面体(5枚組)、
正八面体(12枚組)、正二十面体(30枚組)」
作：川島英明(P.4)

Shell-Patterned Modules :
Icosahedron (5 sheets),
Octahedron (12 sheets),
Icosahedron (30 sheets) :
Kawashima Hideaki (P.4)

■かたつむりの殻のような頂点から、支柱が螺旋状に伸びてゆくユニット。涼しげな配色と風通しの良さから、浴衣のようなイメージが呼び起こされるかもしれません。複数の完成品を鎖のように繋いでみたり、穴の開いている部分に別の作品を組み合わせて構成したり、いろいろな方向性を開拓してみましょう。



菱形の鶴
A Crane from a Diamond-Shape



伏見鶴
Husimi Crane

「菱形の鶴」「伏見鶴」作：伏見康治+伏見満枝
折り：編集部(P.8)

A Crane from a Diamond-Shape, Husimi Crane :
Husimi Koki and Husimi Mitue
Folded by an Editorial Staff (P.8)

■菱形や扇型の用紙でも自由自在、前後のバランスをさまざまに変化させることが可能となっていますが、これも「鶴心」の発見があったからこそ。折り紙の世界が幾何学的思考と深く交流を始めるきっかけをつくりだした、伏見夫妻の代表的な業績に触れてみてください。

「ツル」作：神谷哲史(P.22)

Crane : Kamiya Satoshi (P.22)

■鶴が持つイメージはさまざまですが、この作品は「優美」とか「豪華」というような方向ではなく、「神聖」もしくは「神々しい」が合っているのではないか、と思える仕上がりです。約1年前に「レイク」のTVCMで登場した際にご覧になった方も多いのではないのでしょうか。実は、本作を巨大に折ったものがおりがみはうすの天井から吊されているのですが、本を選ぶのに集中しすぎて気付かずに帰ってしまうひと(ごく一部)いらっしゃるらしい？



2008 OrigamiUSAコンベンション展示作品より Exhibits from the 2008 OrigamiUSA Convention

■期待の新世代6名が、今年はずいぶんNYに殴り込み。海外の愛好家達との交流のなかで、熱気の渦に圧倒されながらもさらに火に油を注いでお互いに良い刺激となり、ちょっと成長して帰ってきたようです。



Quentin Trollip



Daniel Kwan



Jon Tucker



Christine Edison

Origami Design Challenge

Topic: Prehistoric Non-Dinosaur



Robert J. Lang



Brian Chan



Kenny Baclawski



Bernie Peyton



Joseph Wu



Hoang Trung Thanh
(Vietnam Origami Group)



Tran Trung Hieu (Vietnam Origami Group)



Nguyen Hung Cuong
(Vietnam Origami Group)



Horiguchi Naoto



Tran Trung Hieu
(Vietnam Origami Group)



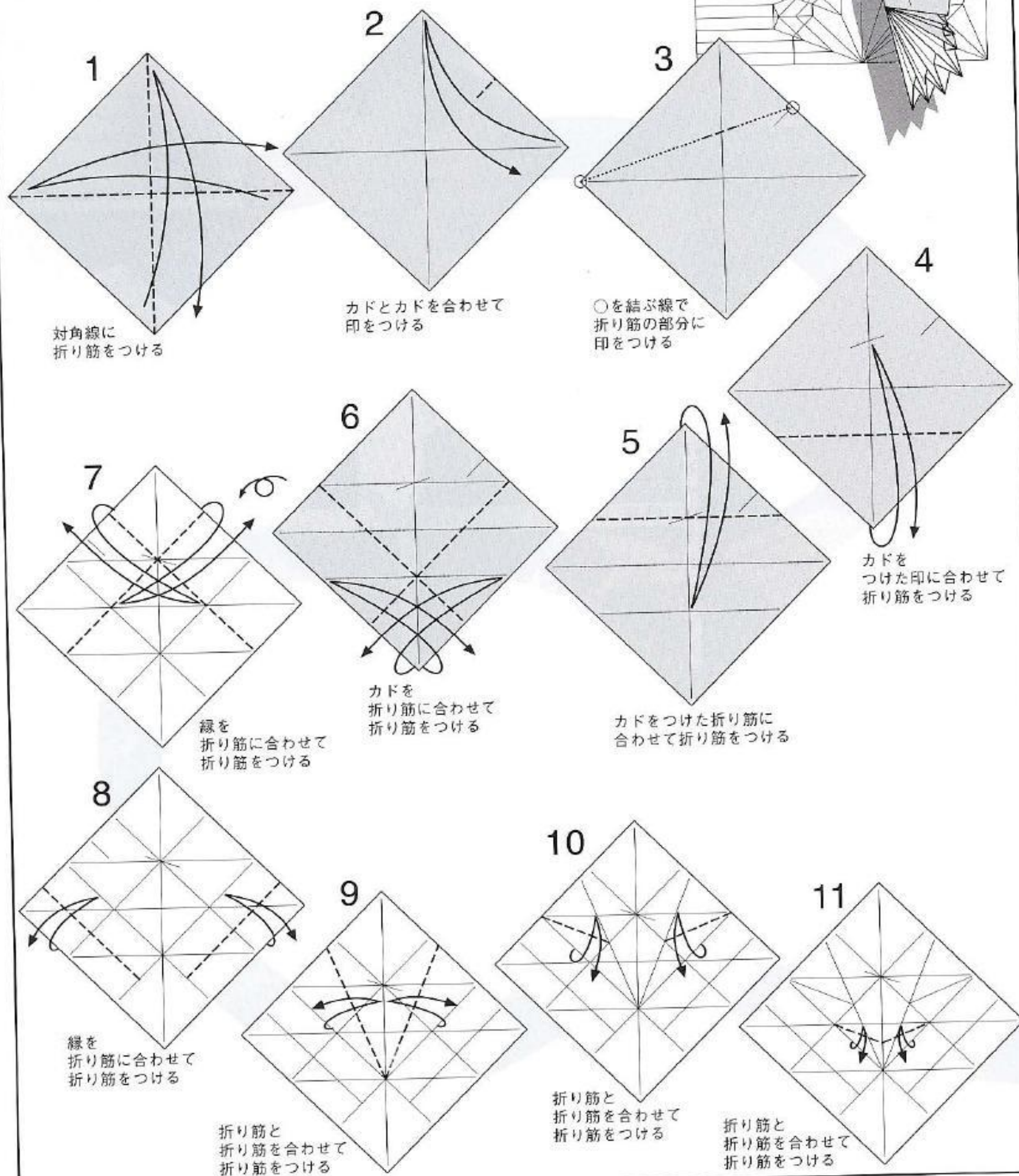
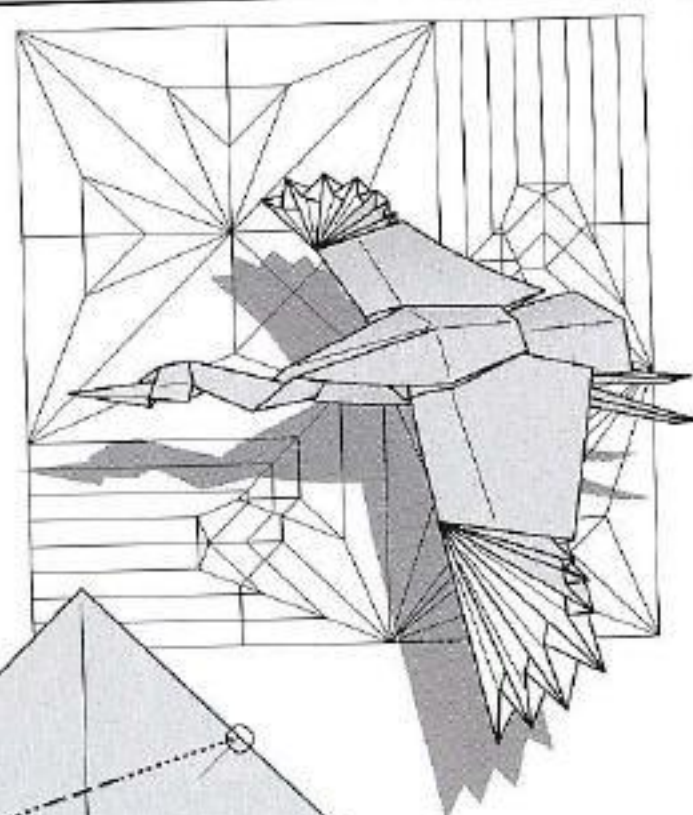
Tran Trung Hieu
(Vietnam Origami Group)

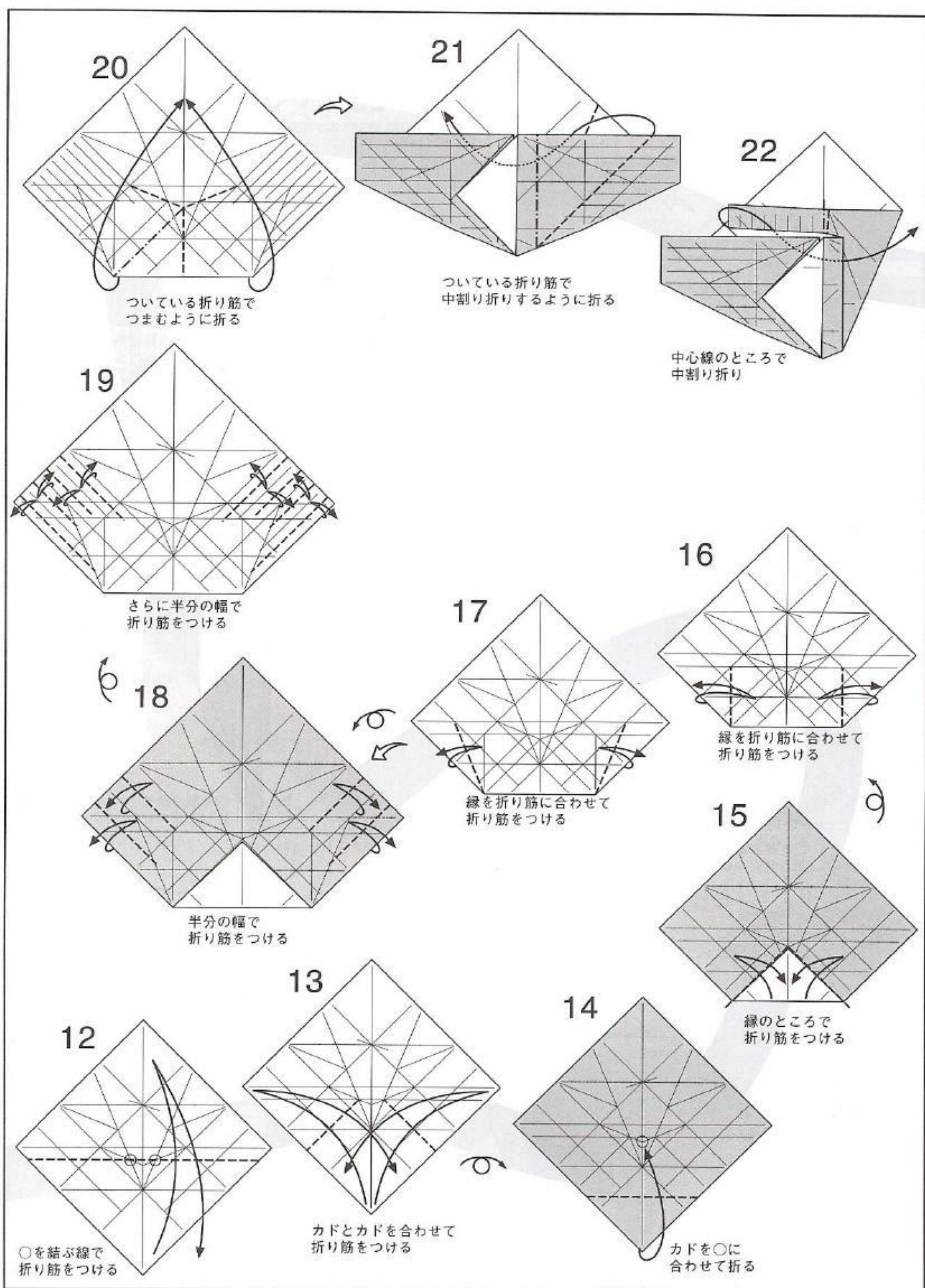
■今年は新たにベトナムからも参戦あり。丁寧な作業ですみすみまで繊細に仕上げられ、曲面加工がゆきとどいた生物作品群です。

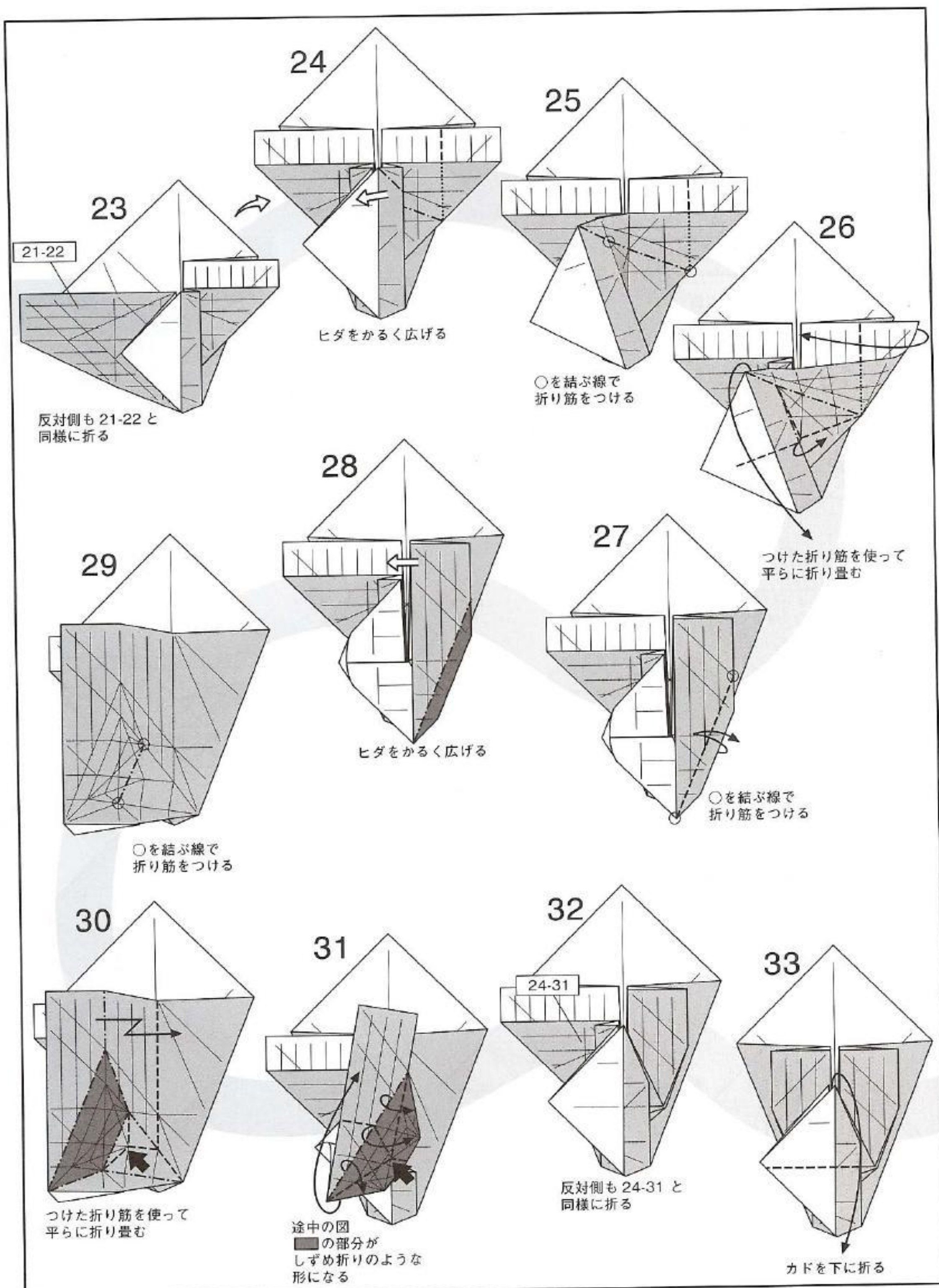
ツル

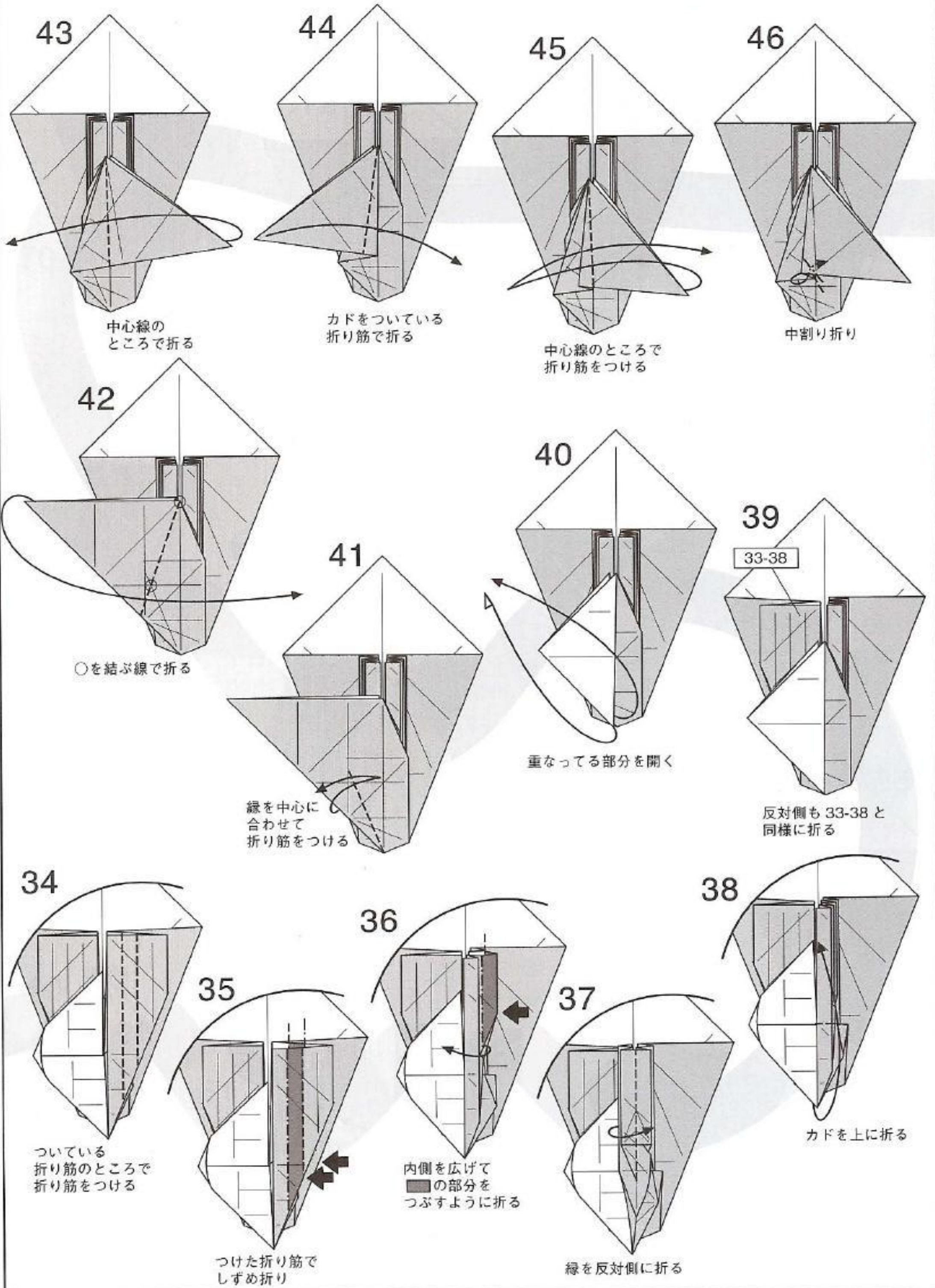
Crane

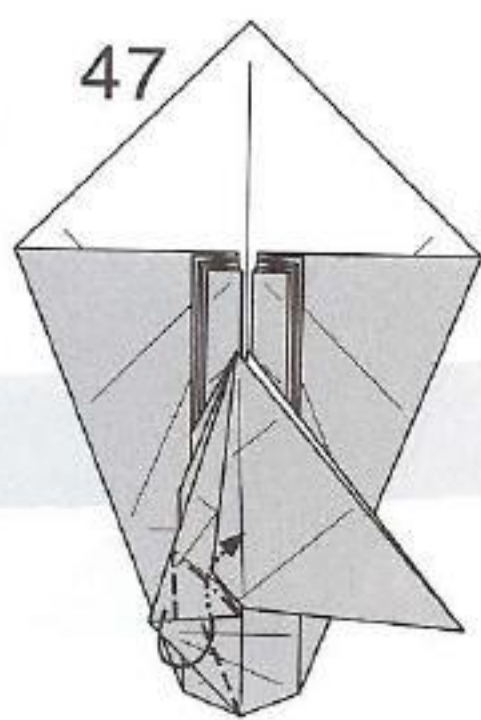
神谷哲史
Model & Diagrams by Kamiya Satoshi



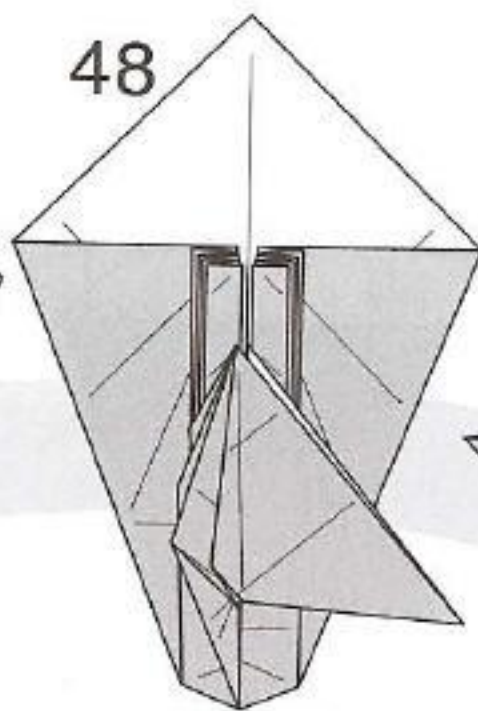




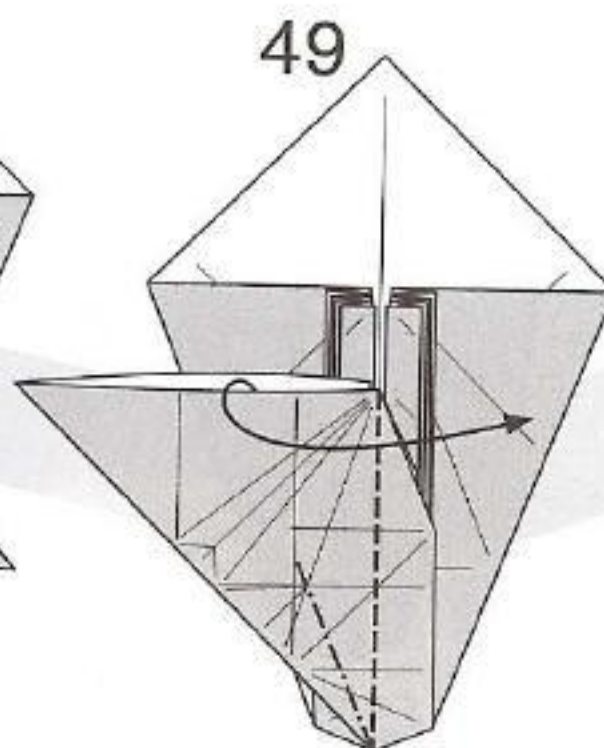




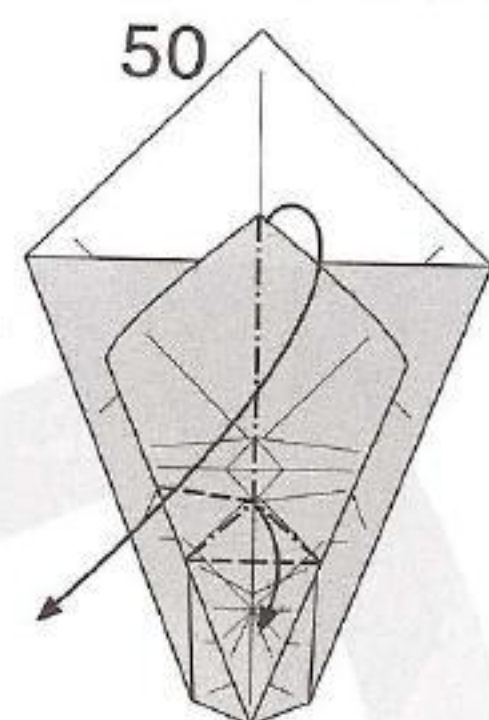
中割り折りする
ように折る



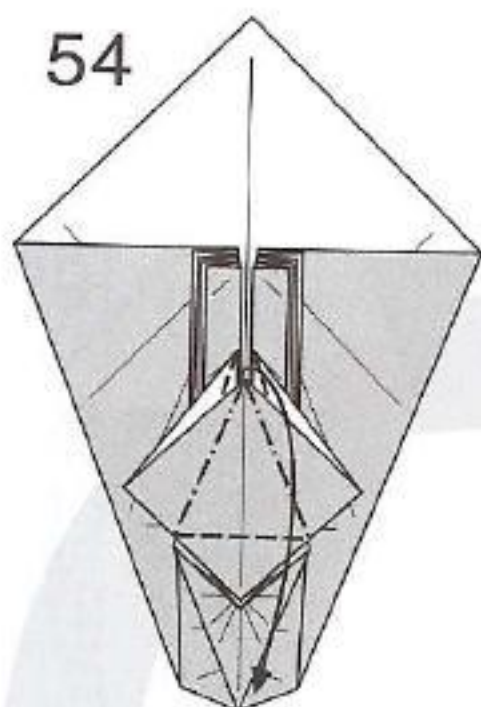
41 の形に戻す



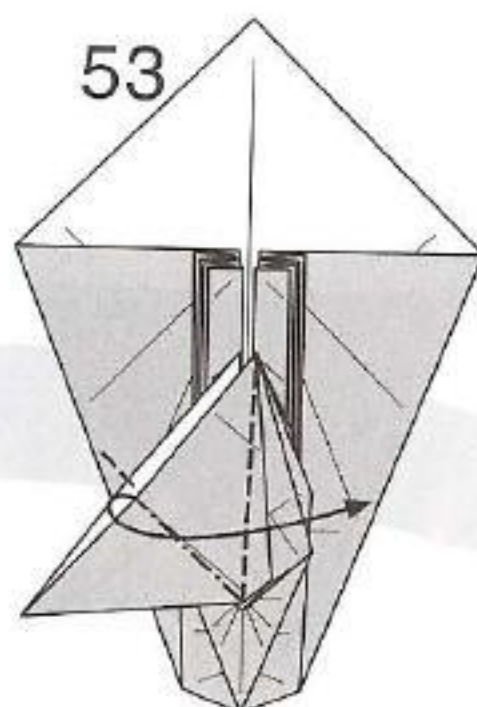
内側を広げて
つぶすように折る



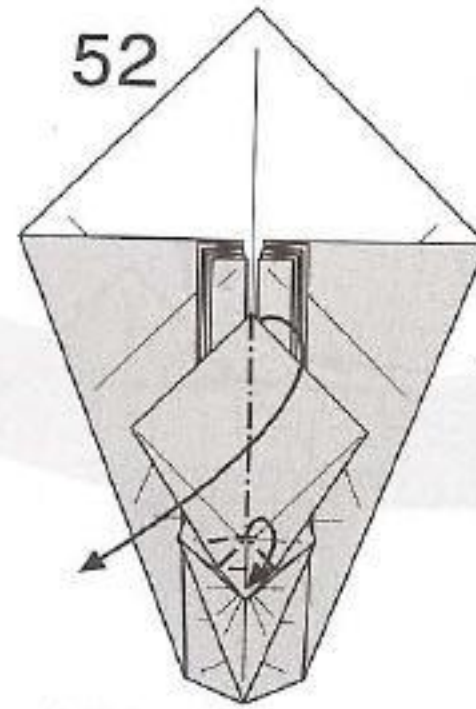
カドをついている折り筋で
つまむように折り畳む



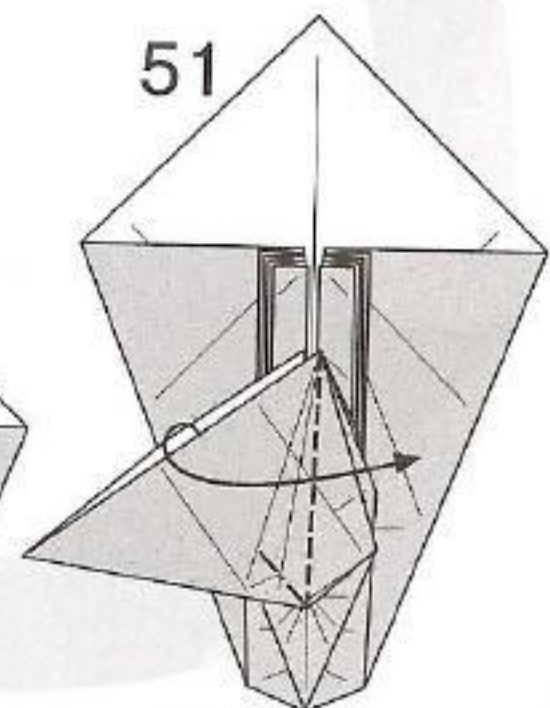
花弁折り



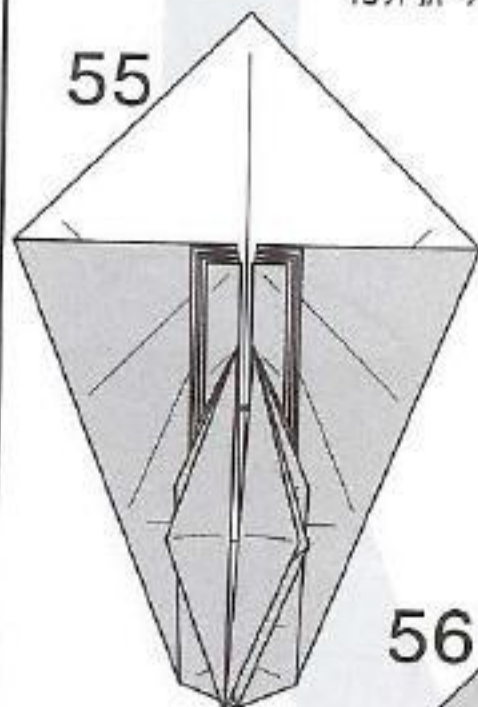
内側を広げて
つぶすように折る



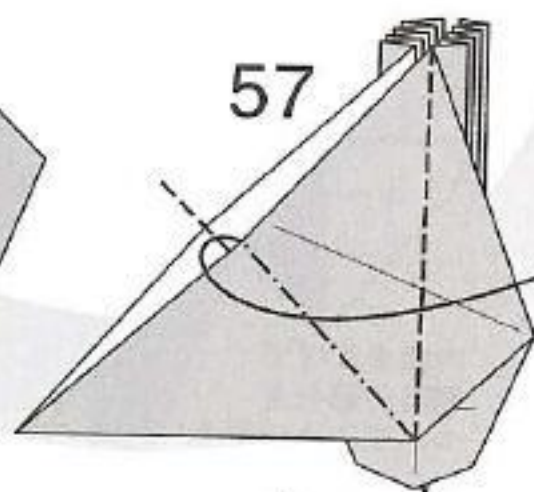
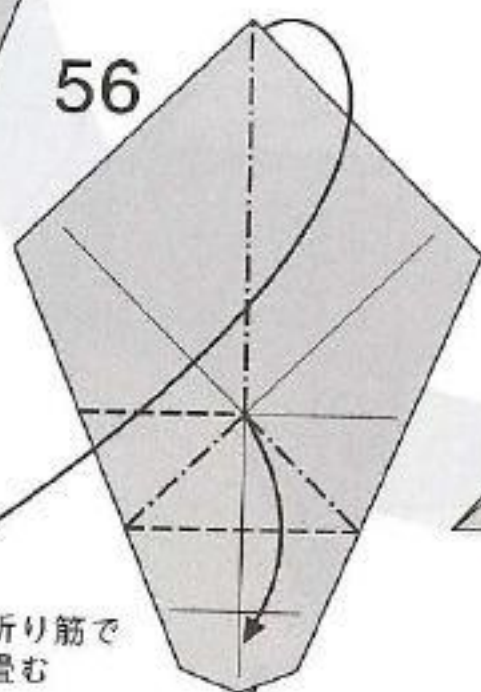
カドをついている折り筋で
つまむように折り畳む



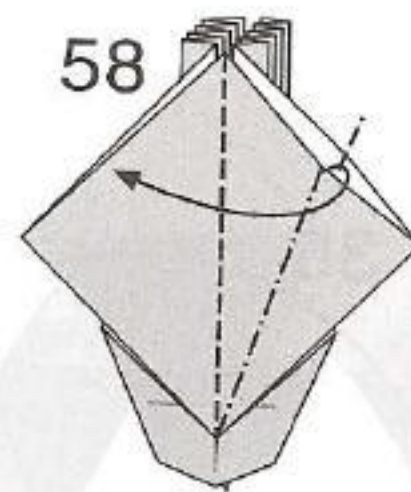
内側を広げて
つぶすように折る



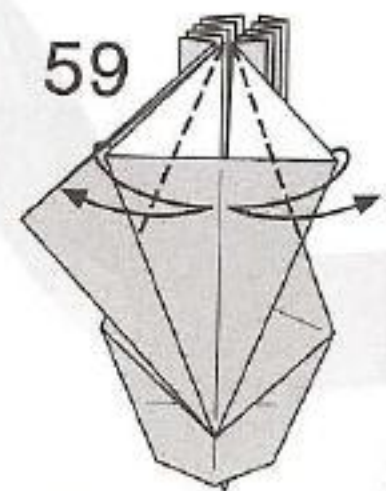
カドをついている折り筋で
つまむように折り畳む



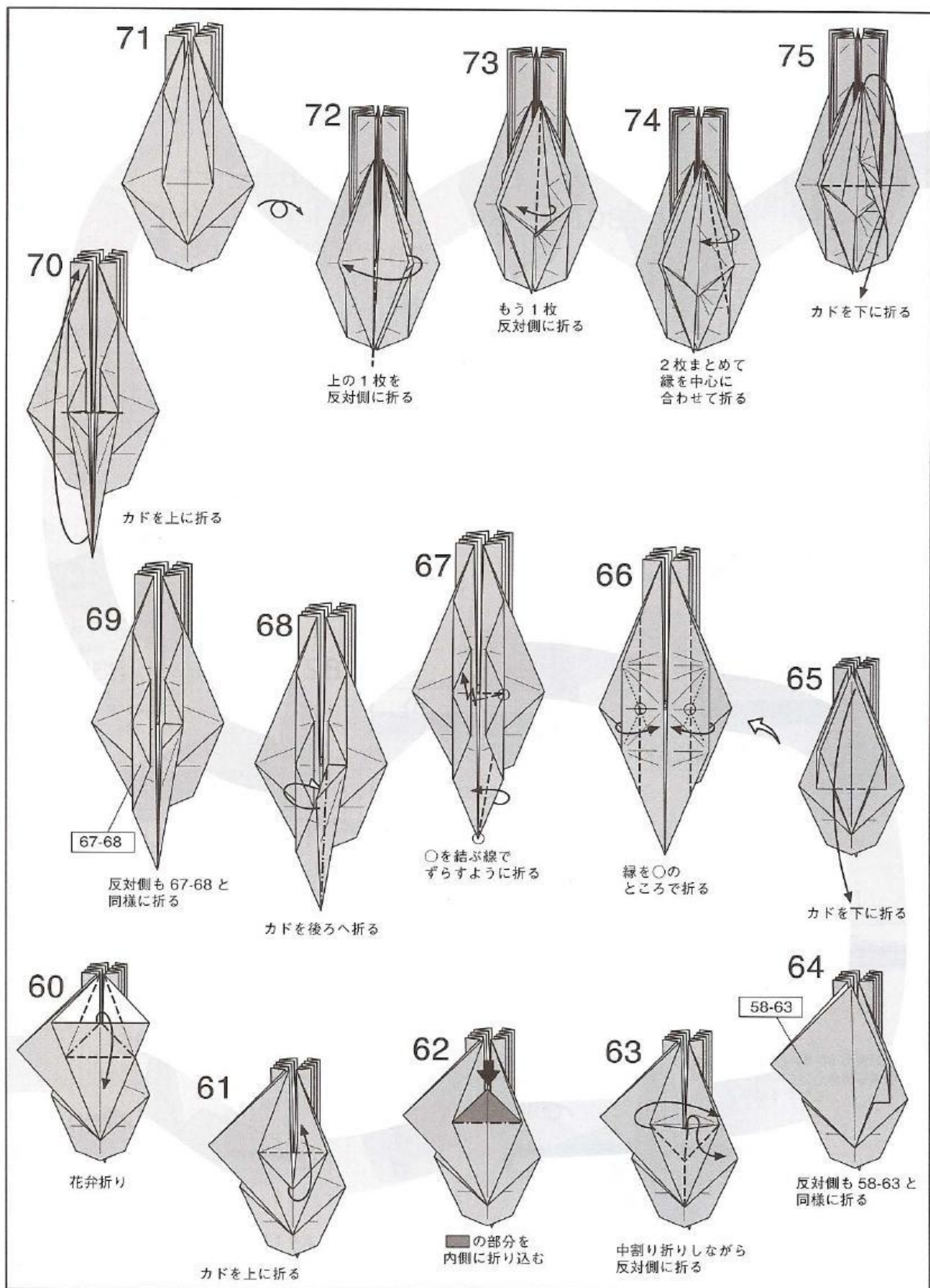
内側を広げて
つぶすように折る

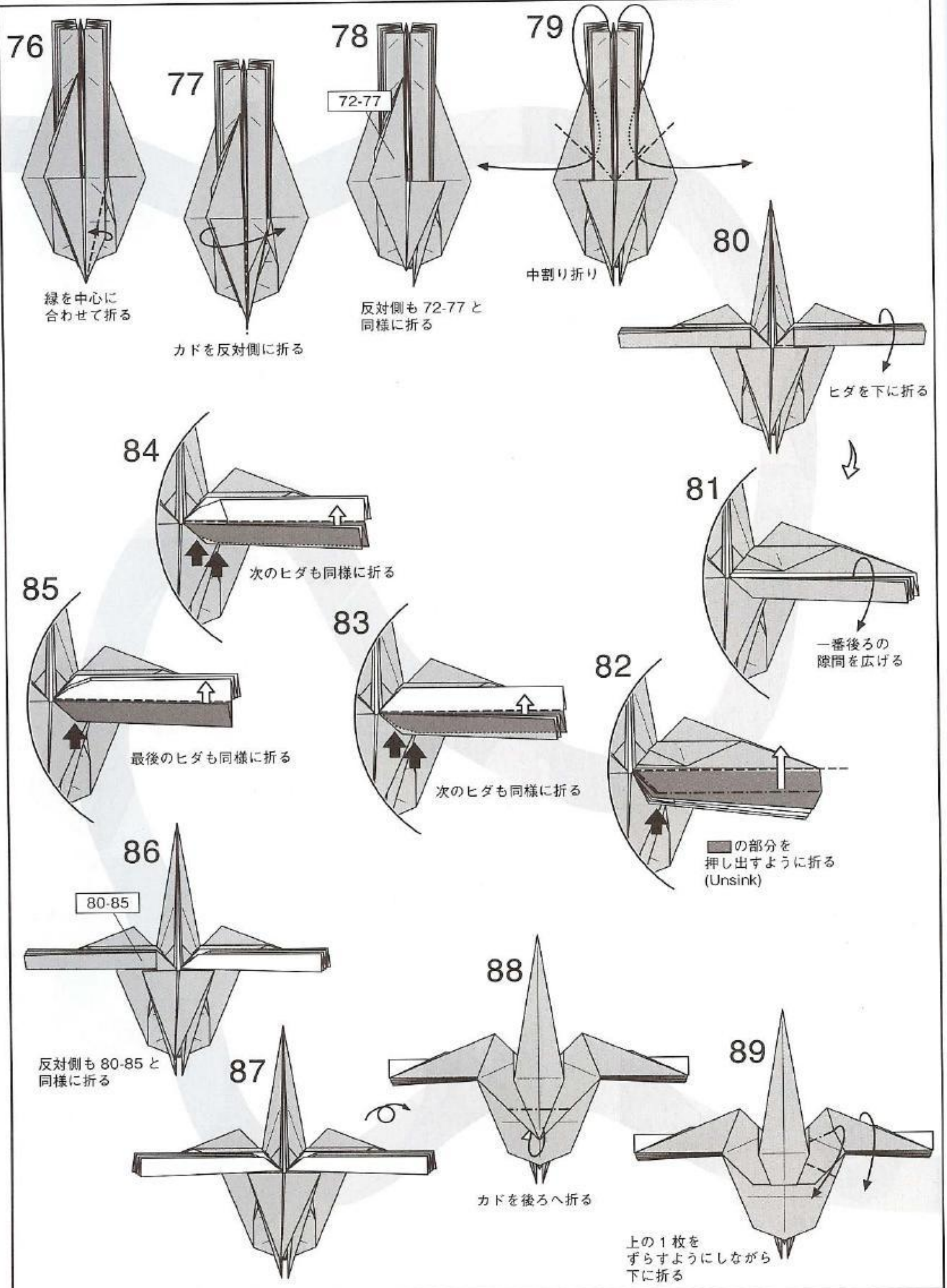


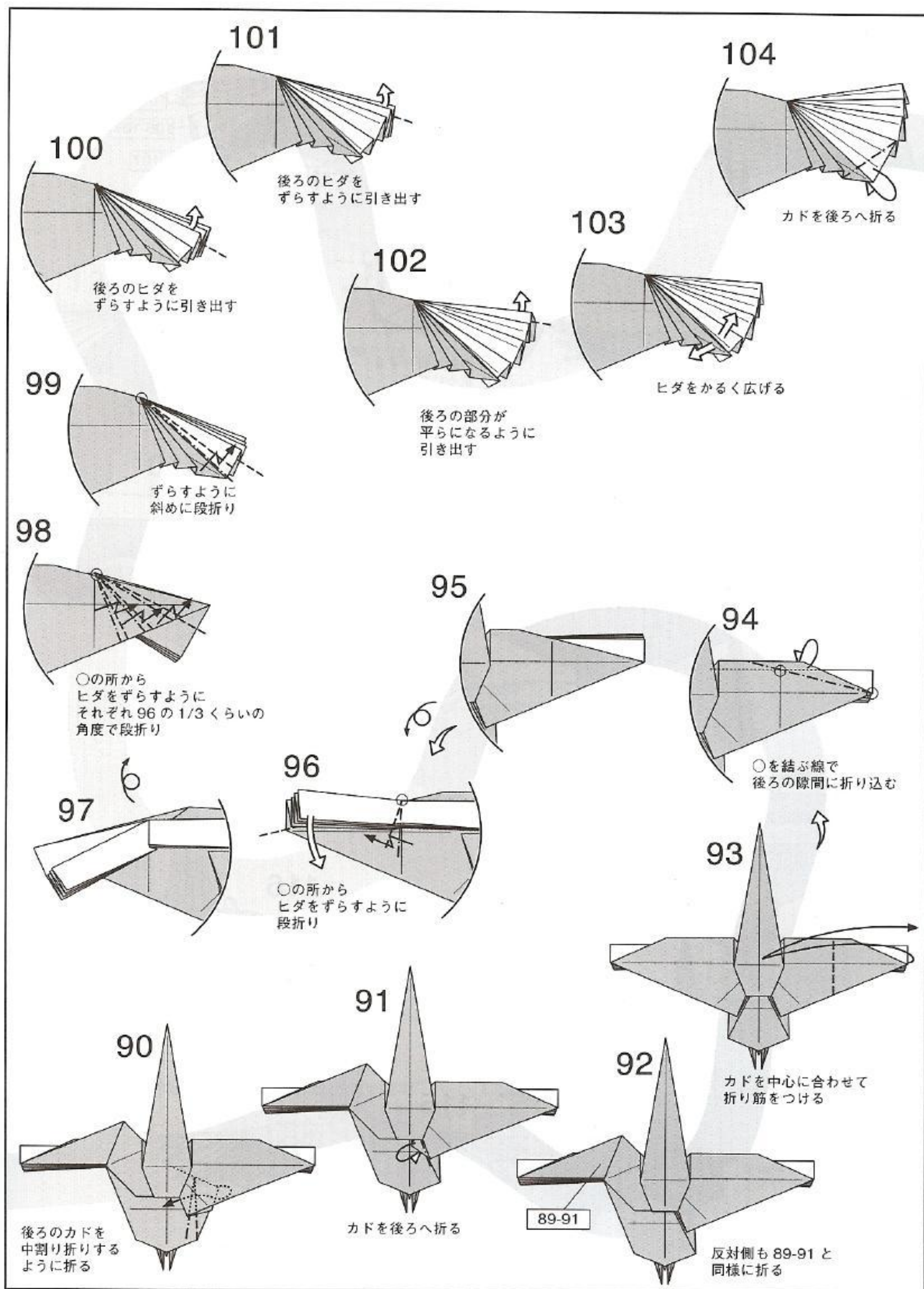
内側を広げて
つぶすように折る

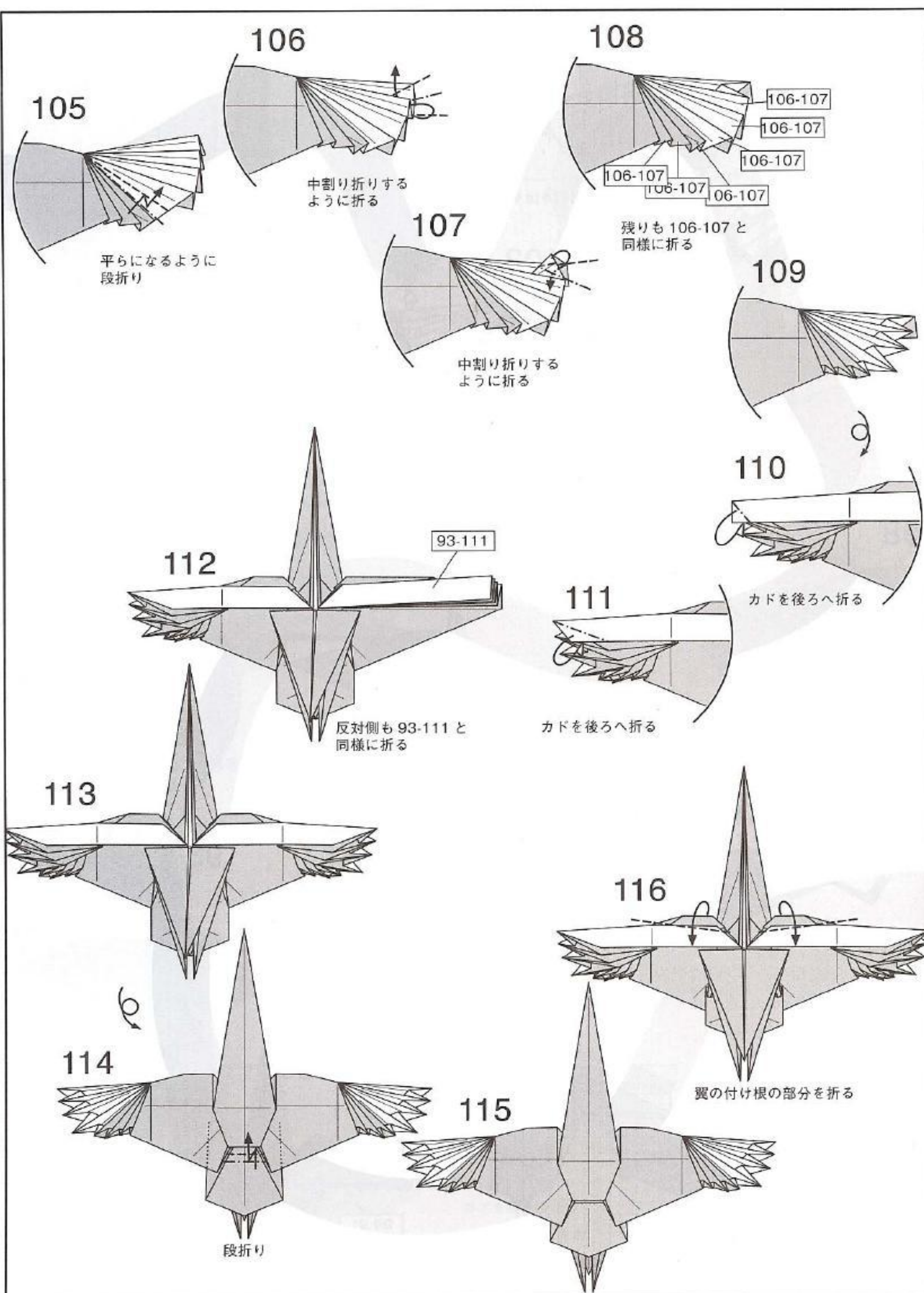


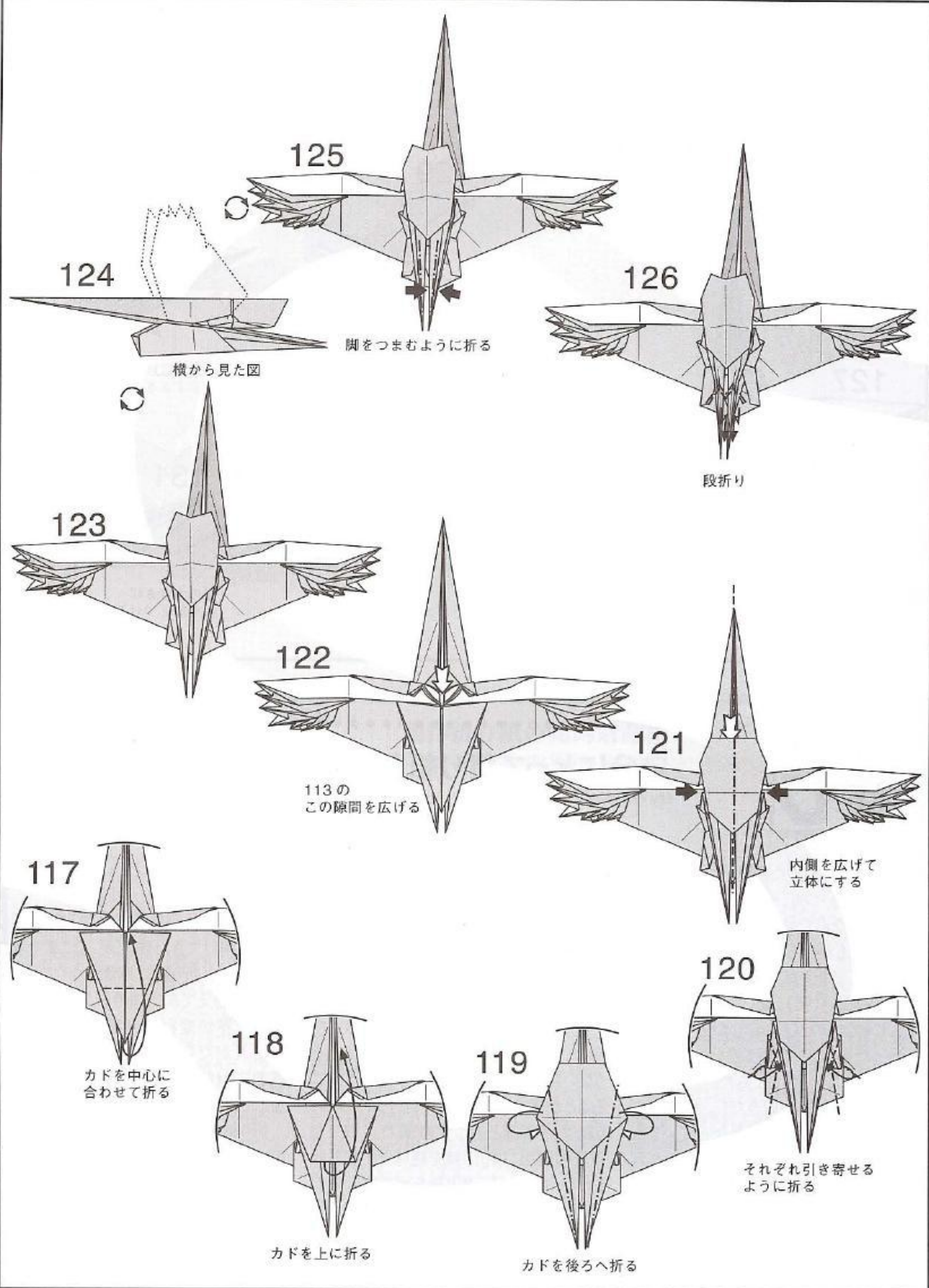
縁を中心に合わせて
折り筋をつける

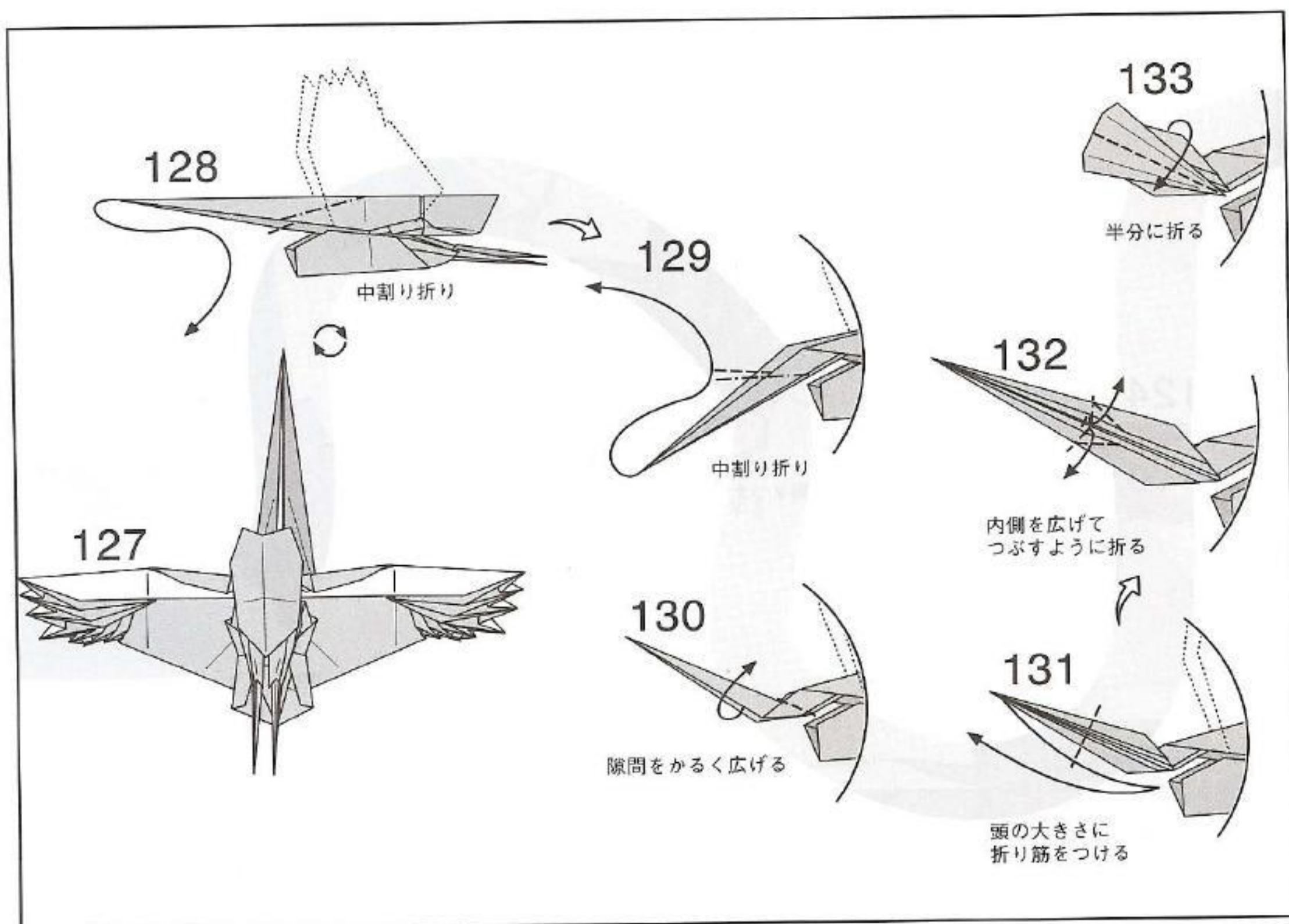












Orisuzi ("Fold-Creases")

自分にとって折り紙とは？

My Origami History

谷田 尚之

Yada Naoyuki

折り紙を始めたのはいつから?と聞かれるといつも、それはわからないと答える。なんで始めたのかを聞かれても、それもわからないと答える。自分でも、なんで折り紙をやっているのかはわからない(笑)。楽しいから折ってるんじゃないの?くらいにしか考えていなかった僕だが、改めて自分と折り紙の関係について考えてみた。

僕は折り紙が好きだし、できるなら死ぬまで折り紙と付き合っていきたい。いままではなぜ好きかと聞かれれば、楽しいからとしか答えなかっただろう。しかしよく考えてみると、そんな簡単なものでもないと思う。

では何故、折り紙は楽しいと感じる

のか。例えば、自分で作品を生み出す喜び、誰かが発見した折り方を自分の手で体感し、知識を広げる喜び。楽しいと感じる理由はいくらでもあるだろう。その中でも特に楽しいと感じる時間が2つある。1つは上の例と少し重なるところがあるのだが、作品が完成する、もしくは完成した瞬間。これほど嬉しく楽しい時間はそうそうないだろう。もう1つは最近になって感じるが多くなった。そう、自分以外の折り紙愛好家達と過ごす時間だ。いままで自分の周りには折り紙を趣味とする人は1人もいなかった。折り紙をする時はいつも1人で、とにかく無言で折り続けた。しかし、月に1度の定例会に参加するようになって、折り紙友達がどんどん増えてき

た。その折り紙友達と過ごす時間がとにかく楽しくてしかたがない。

いままでは一方的に「楽しい楽しい」と言い続けてきた僕だが、ここまで考えてみると、折り紙に感謝しなくてはならないと思えてきた。折り紙のおかげで見る世界が変わり、知識も増え、大切な友人がたくさん作れた。感謝しても感謝しきれないくらいのものを折り紙を通じて得ることができたと思う。

折り紙に対する考えが少し変わってきた僕。だけど今また、なんで折り紙をするのかと聞かれたら結局こう答えるだろう。もちろん楽しいから、と。

展開図折りに

Crease Pattern
Challenge!

挑戦

第54回

にらみ鯛

No Eating! (Sea Bream)

五十嵐智祐

Igarashi Tomosuke

Created : 2008.4

Paper Size : 60x60cm

Length : 25cm

正月に聞いた睨み鯛の風習、ピラニア用に試作した頭部、そして数年来追求してきた鱗の造形が「にらみ鯛がにらみ返してきたら?」というアイデアを経て、形になりました。

折鶴の基本形を元にした頭部と、対角線に平行な線で折りたたまれた胴体の組み合わせが基本となり、そこに目玉や牙の並んだ口、そして鱗が表現されています。鱗域の前後端の折り方で、鱗を表す斜めの段折りをすべて吸収し、頭部や尾部へ影響することを防いでいます。

展開図折りをされる際は、肝心の鱗を崩さないよう細心の注意が必要です。まず基本線から細かな折り線まで、予め折り目をつけた上で、鱗を折ります。鱗を構成する2種類の斜めの蛇腹と、それらが合わさっている体軸に直角の蛇腹を同時にたたんでいきます。鱗域の前後端は一単位が図2のようになっています。作品のように鱗を高い密度で折るためには何度か別の紙で練習されたほうが安心です。鱗を折り上げたら基本線をたたみます。牙は先端の枠を細かく段折りすることで、目は頭部の左右の枠に中割り折りと袋折りにより白目と目玉を作っています。背鰭、腹鰭は鱗の折りによって現れた段折りを利用して鰭条を表現します。臀鰭は腹鰭の後ろに紙が余りますので、ここを段折りして作ります。鰭はぐらい折りの要素が強いので鯛に似るよう各自研究されてください。飾るためには頭の裏側や鰭の付け根

に糊付けを施します。鱗は微調整すれば、身をくねらせるように整形することも可能です。

哺乳類や節足動物に比べ、魚類はこれまでスーパーコンプレックス折り紙の題材になり難い存在でしたが、ラング氏の鯉を皮切りにすばらしい作品が生まれてつづつあります。重力の制約を受けない水中生物の姿はすばらしい題材の宝庫です。みなさんも、四角い羅針盤を手にも、新たな創作の海に漕ぎ出されてはいかがでしょうか。

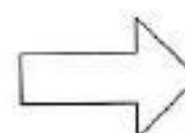
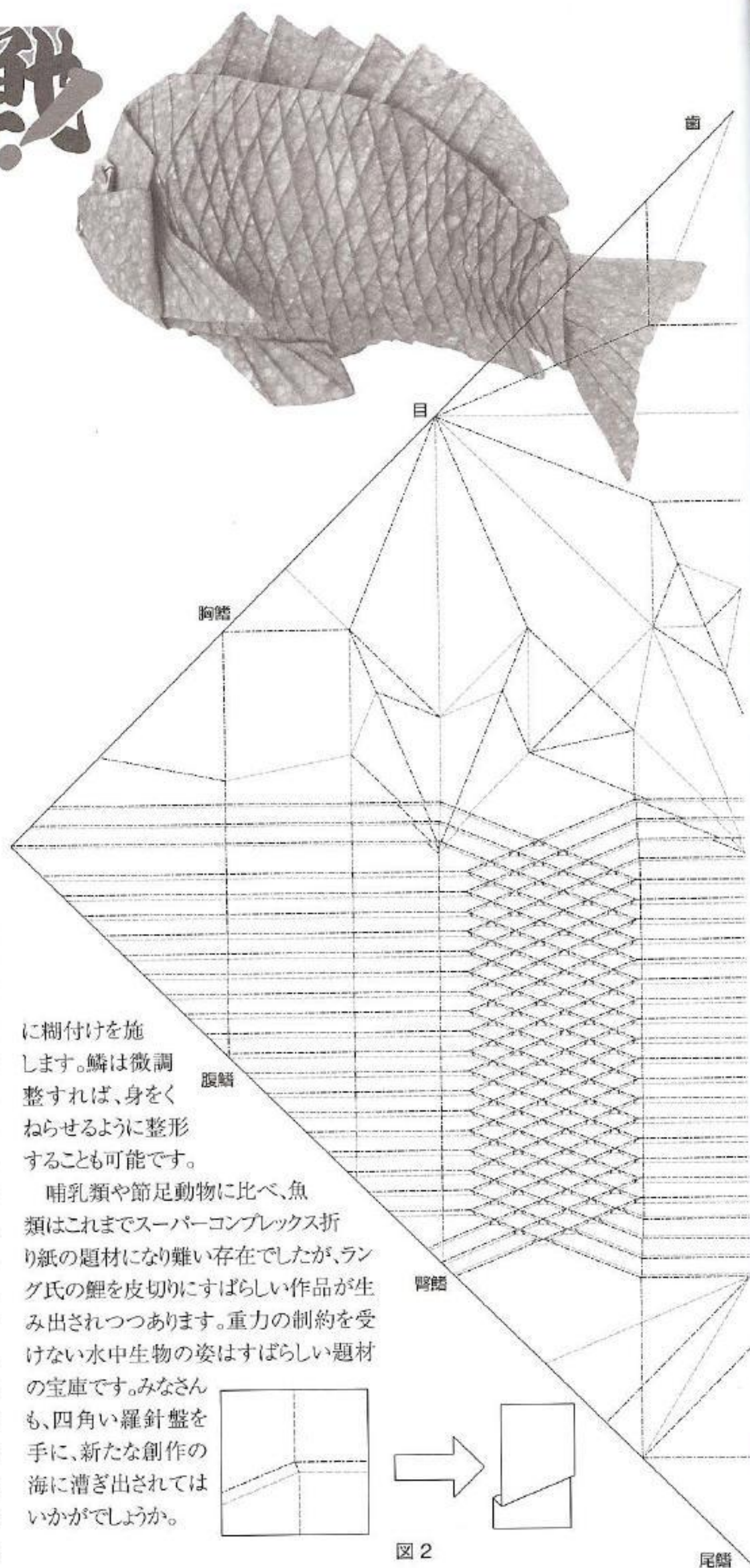


図2



File-29

佐藤直幹

Sato Naomiki

佐藤直幹 (Sato Naomiki) =
パリ在住、フランス折紙協会
副会長。



MFPP (フランス折紙協会: 創立30年) の副会長・佐藤直幹さんは、長い髪をポニーテールにした飄々とした風貌を持つ、フランスを生活の場にするコスモポリタン (世界市民) である。言語学の勉強をするためにフランスに渡ったのは13年前、日本に帰るのもまだそうで、いまではすっかりパリが自分の町になっている。日本語、フランス語はもちろん、英語、韓国語も流暢に話し読み書きし、フランスの手話も使えるマルチリンガル、そして、フランスとの付き合い以上に長い折り紙との付き合いがあるペーパーフォルダーである。

■折り紙歴

学校にあがる前から紙による工作が好きだったという佐藤さんだが、そのころに熱中したのは切り紙であったという。とにかく紙という素材に触れているのが性に合ったのだそうだ。その後、本誌の連載「折紙図書館の本棚から」でも紹介した桃谷好英さんの「折り紙入門」をきっかけにして折り紙の面白さにも目覚め、中学生になって、日本折紙協会の『おりがみ』の購読も始めることになる。当時は、協会の名簿が購読者に配布されていたらしいのだが、その名簿を見る限り、長野県で唯一の会員ということで、近隣に折り紙の仲間もなく、とにかく情報に飢

えていたという。昆虫少年でもあった佐藤少年のヒーローは、『おりがみ』に続々と昆虫作品を発表していた西川誠司さん。昨年、その西川さんをMFPPのコンベンションに呼ぶことができて感激した、と語っていた。

このころには創作も始めていて、写真の「タガメ」は当時の作品である。無理な折り目を使わないすっきりとした作風で、何年も前の作品なのに、すらすらと折りあげてくれた。これは、『おりがみ』の投稿欄に掲載されたいいくつかの作品のうちのひとつでもある。好きな作品は、やはり無理なく折れるものだとのことだが、凝った作品も嫌いではないという。一方、最近では折り紙教室をしていることもあって、シンプルで意外性もあり、しかも遊べる作品が、とにかく「必要」だという。

■フランスで

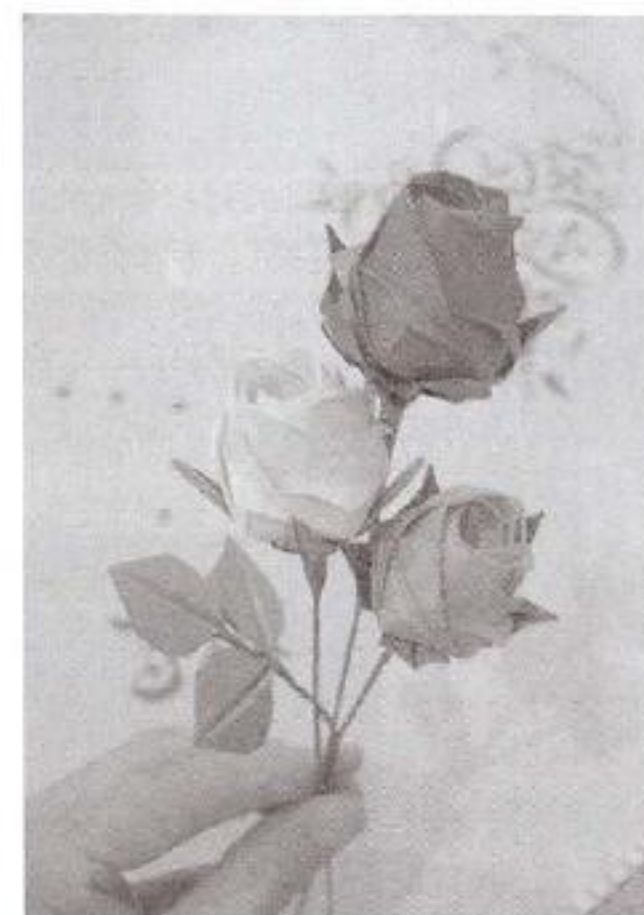
少年時代が過ぎて、その後、折り紙とは少し離れ、渡仏後、MFPPとも接触していなかった佐藤さんだが、10年前からMFPPの活動に参加し、彼の中で折り紙の持つ意味が再び大きくなる。

現在は、MFPPの運営のほかに、月に数回、子ども大人双方に折り紙や切り紙の教室も開いている。ここで切り紙というのは、開くと立体的なカタチが現れるポップアップカードのことだ。写真にもあるように、とても洗練されている。

その教室には、さすがパリというべきか、さまざま出自のひとたちが集まる。パリはヨーロッパの中にあって、イスラムやアフリカとの連結点になっている都市である。折り紙どころか、紙を折るという経験が

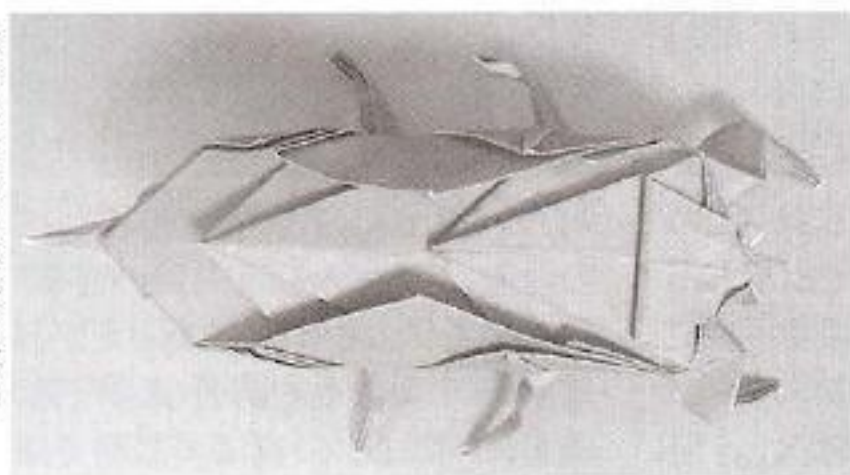
まったくなかったのに等しい子どもたちに教える機会もあるという。そんな子どもたちに折り紙を教える困難さと、それゆえの楽しみ。異文化の交流の中から、なにか新しいものが生まれてくるかもしれないと考えると、わくわくと語っていた。不思議なもので、折り紙はまったく初めてなのに、驚くほどうまく折る子どももいるという。

そう、佐藤さんは、日・英・仏・韓・仏手話の他に、「折り紙」という言語も操って、コミュニケーションの楽しさを様々なひとに伝え、そして自らも楽しむ、日本のこころを持った世界市民なのである。



近作「五弁の薔薇」川崎敏和さんの「バラ」を五角形化したモデル

「タガメ」中学生時代の作品



ポップアップカードの一例

Rabbit Ear つまみおり Information

◆OUSAコンベンション2008

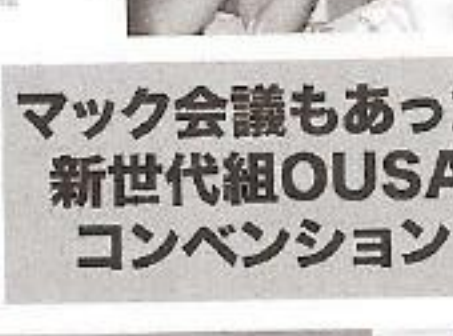
■50周年

今年はOrigamiUSA設立50周年ということで、日本折紙学会もこれを祝福すべく記念の盾を持参し、アニュアル・ミーティングでは贈呈式が行われた。また、TVチャンピオンの収録時に背景として使われていた、「折り紙」と書かれた巨大なバナーも50周年のプレゼントとして持参。50周年記念という文字を入れるかどうかについては、トニー・チェン氏の「今後も使えるようにしたい。」という希望により、下の方に「JOASとおりがみはうすからのプレゼントとして」という文字だけを書き加えるだけに留めた。予めメールでサイズを連絡し、それを受けたジューン・サカモト氏が、ぴったりの竿とスタンドを用意してくれた。ホスピタリティーのある、広くて天井の高いメイン会場に、「折り紙」の文字はとても映えていた。

今年のコンベンション記念Tシャツの色は、リリアン・オープンハイマー氏が好きだったという赤。左胸にはOUSAのマーク、背面にはブライアン・チャン氏の作品を図案化したものがプリントされた豪華版だ。

■おりがみ新世代がコンベンションデビュー?!

今回のコンベンションには、「おりがみ新世代」というウェブサイトで、盛んに創作作品を発表している、日本の若手達が多く参



▲OUSA50周年のお祝いにJOASから記念の盾が贈られた

◀TVチャンピオンのスタジオで使われたバナーを背景にOUSA会長のトニー・チェン氏と山口JOAS事務局長

マック会議もあった 新世代組OUSA コンベンション

▲折り紙教室も楽しい経験だった(?)

▼折っているか寝ているかだった宮本宙也君。この写真はGiang Dinhさんから送られてきた



加したのも注目すべきポイントだ。第7回のTVチャンピオンに挑戦者として出場した大学生4人(勝田恭平、金沢隆史、堀口直人、宮本宙也)に加え、東海友の会のメンバーである大学生2人(田中幹人、各務

均)の合計6人。飛行機での移動と13時間の時差、着いてからは5日間の寮暮らしという、慣れないこと尽くめであったが、教室ではオリジナル作品を講習し、また他の人の講習にも参加して、夜は大部屋で深夜まで

折り紙をするなど、言葉の壁を越えて交流をしていたようである。

■エキシビション

NYコンベンションの楽しみの一つが、大きな会場を使った作品展示だ。昨年亡くなられたピアン・コーネリアス氏が長年責任者として質の高いものを見せてくれた。今年はルーザン・ベスマン氏が責任者となったようである。入り口には亡きコーネリアス氏を偲ぶパネルや作品が展示されており、訪れる人々は思いを馳せていた。

常連のビッグネームの展示は勿論だが、日本以上に若手の発展がめざましいのも見所である。彼らは積極的に新作を出し、素材を工夫し、そして「見てもらう」ことに情熱を注ぐ。だからキャプション一つにもこだわりが見られる。この姿勢を間近に見た日本の若手6人には、大きな刺激になったはずだ。

■レセプション



▲大橋NOA理事長の祝辞。隣は通訳をしていたOUSAの近藤さん



▲懇親会会場を和ませてくれたオランダでも好評だったというパフォーマンス(ウェディングドレスの意味は?)

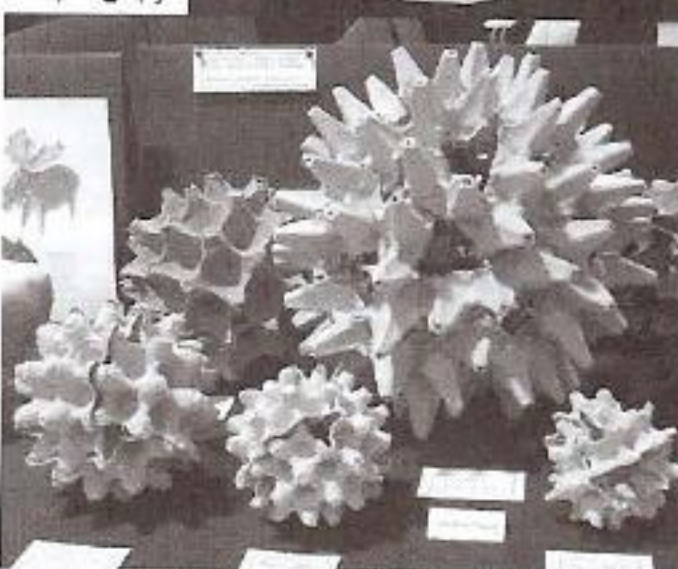
NOAの大橋皓也理事長による50周年のお祝いの挨拶の後、オランダのコンベンションでも好評だったという、中島進氏によるパフォーマンスが披露された。和紙を使ったドレスを着た女性を、折り紙のネクタイをした中島氏がエスコートして現れ、OUSAの代表であるトニー・チェン氏と交代したところで、折り紙の紙吹雪が散って、会場の皆の喝采を浴びていた。

若手6人の座ったテーブルには、ブライアン・チャン氏やボストンの滞在先から直行した館知宏氏が同席し、そこへ食事を終えた他の若者達が集まって、折り紙談義がはずんでいたようだ。

帰りの飛行機では、全員ぐっすりというかぐったりして眠っていたようである。ハードスケジュールではあったが、良い刺激を沢山受けたことと思う。今後の彼らの活動に反映されていくことを期待したい。(山口真)

▶レーザーで折り筋をつけられて折られたロバート・ラング氏の作品

▼卵のバックを利用したジーン・モスリー氏のユツト作品



▲OUSAスペシャルゲストの二人。フランスのニコラス・ステリー氏(左)とイギリスのマックス・ヒューム氏

◆著作権を考える国際会議

山口 真

折り図そのものには著作権があるが、折り紙の作品自体に著作権はあるのか。先達の多くの人々が頭を悩ませてきた、甚だ難しい問題である。

過去においても、色々と取沙汰されてきたが、はっきりとした答えはまだ出ていない。裁判に持ち込んでも判例が無く、場合によっては負けてしまって悪い前例を作ることもなりかねず、困難を極めている。

しかし昨年、韓国でこの著作権に関する裁判があり、著作権を主張した方が勝ったという話を聞いている。

国内では、折り紙関連の本の出版が近年益々盛んになってきている。多方面から折り紙の本が注目され、出版されていることは、市場の拡大にもつながり、折り紙人としては嬉しいことである。しかしその一方で、

人が工夫を重ねて生み出した作品を、安易に使って発表している本が増えているのも事実だ。

これは国内だけの問題ではなく、海外作家を含めた問題として、国際的な波紋を呼んでいる。インターネットの普及と発展により、違法に本の内容が公開され、作品の折り方が広まり、創作者の知らぬところで使われているといったことが、国を越えて行われているのだ。

私はこれらの事情を踏まえ、おりがみはうす設立20周年の記念事業として、海外から数人のゲストを招き、国際ナショナル・コピーライト・ミーティング(ICM、仮称)なるものを開催することにした。これは、長い間折り紙に関わってきた者として、折り紙界に多少なりとも役立つことで、感謝の気持ちを

還元できればと企画したものである。

この会議は、山口個人やおりがみはうすが何かを決めようという趣旨のものではない。ここまで混乱している世界状況を参加者全員で見直し、これをどのように考え、どのようにしていくことがこの世界にとって望ましいのかという「意見」を出し合うことを目的としている。結論などまだまだ先のことで、まずは現状把握と意見の交換から始めようというものだ。

なお、会期は2008年10月12,13日の二日間。場所はJOASホールを予定しているが、参加希望者が多い場合は会場が変更される場合がある。海外招待者はデビッド・ブリル氏、ロバート・ラング氏ら10名を予定している。国内参加者はJOAS、NOAからの他に一般参加者についても募集の仮受付をすすめるつもりである。会場の都合もあるので、参加を希望される方は、なるべく早い問い合わせをお願いしたい。

◆折り紙と版画・八坂だより

ここ何年か展覧会を開いていなかった
おりがみはうすで、この度布施知子さんの
協力により、久々に作品展が開かれること
になりました。おりがみはうすでの布施さん
の作品展は今回で2回目。新しい試みとし
て、ご主人である鳥海太郎氏の版画との
コラボレーションによる展示となる。

会期:8月25日～9月30日

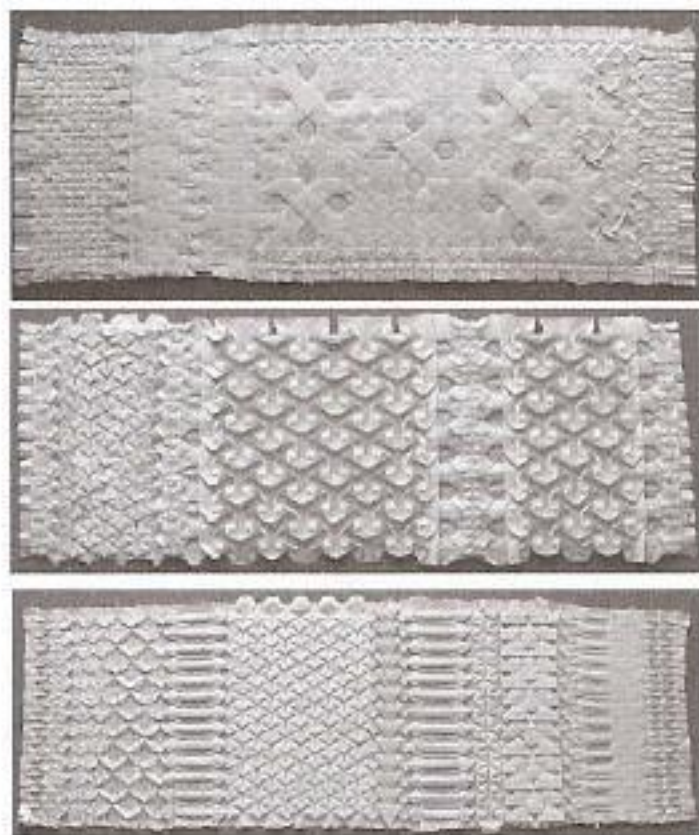
展示内容

7冬ほどかけて折りためてきた布施知子氏
の「混合平織り」と、折り紙に題材をとった
鳥海太郎氏の版画。

＜作者のコメント＞

「冬ごとに平織り作品を折りためてきました。
どう発表するのがいいのかなあ、と思って
いたとき、「しまいこんでいてもしょうがない
よ」と山口さんに声をかけていただき、おり
がみはうすでの展覧会が決まりました。クロ

氏の版画も一緒に、信州八坂の風を感じ
ていただければ幸いです」



展示作品の一部

◆エリック・ジョワゼル作品展

フランスの折り紙作家エリック・ジョワゼ
ル氏の作品展が、おりがみはうすで開かれ
る。日時は確定していないが、10月の中旬
から末までを予定している。ジョワゼル氏自
身が来日し、折り紙教室も開かれる。ジョワ
ゼル氏の教室は、どこの国に行っても人気
がある。彼のパフォーマンスも含めて、参加
するだけでも楽しい教室になりそうだ。

彼の作品には表現、感性に独特のもの
があり、芸術性に優れた作品は見ると
って刺激を与えてくれること間違いなし。

ジョワゼル氏
は期間中、大
体会場に詰め
る予定なので
お楽しみに。

折り紙教室
の日時は未定
であるが、本誌
次号やHPなど
でお知らせす
る予定。



東京友の会 ※折り紙は各自持参

会場=JOASホール/参加費=500円(中学
生以下300円)/講習会=14:00～/研究会
=16:00～

●8月2日(土)/講師:武田直樹/作品:牛乳
パック

●9月6日(土)/講師:未定/作品:未定

東海友の会 ※折り紙は各自持参

会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟
204・205/参加費=大人500円(中学生以
下は200円)/時間=13:00～16:30

●8月16日(土)/講師:未定/作品:未定

●9月20日(土)/講師:未定/作品:未定

関西友の会 ※折り紙は各自持参

会場=神戸女学院大学文学館2階L-34教
室/参加費=なし/時間=13:00～15:00

●8月23日(土)/講師:坪 正、立石浩一、
黒川紀男/作品:Sail Boat(Yuri Shuma-
kov作)、Wagging-Tail Dog(Robert J.
Lang作)、アローヘッド

●9月20日(土)/講師:未定/作品:未定

静岡友の会 ※折り紙は各自持参

会場=「紙友館ますたけ」増武ビル3F/参加
費=500円/時間=10:30～12:00/問いわ
せ:054-254-4541(増武内 山口16～20時)

●9月14日(日) ●10月5日(日)/講師:未定
/作品:未定

九州友の会 ※折り紙は各自持参

会場=佐賀県立アバンセ/参加費=大人
300円、子供100円/時間=13:00～16:00/

●8月31日(日)(予定) ●9月28日(日)(予定)/
講師:未定/作品:未定

■ORIGAMITANTEIDAN / No.110 / Published on 25, July 2008 by Japan Origami Academic Society, 1-33-8-216
Hakusan Bunkyo-ku 113-0001 Tokyo JAPAN / Cover Photo: "No Eating! (Sea Bream)" Produced by Igarashi To-
mosuke / Photographed by Matsuura Eiko / Publisher: Maekawa Jun / Editor in Chief: Yamaguchi Makoto / Editor:
Matsuura Eiko, Kamiya Satoshi / Editorial Design: ORIGAMI HOUSE / Translator: Tateishi Koichi

●イベント情報

■NHK夏休み親子で一緒「おしゃれ工
房・熱中時間」フェスタ IN 富山

会期:8月16日～8月31日。会場:富山市民プ
ラザ。展示内容:NHK番組関係者による
作品展に布施知子さんが折り紙で参加。

■「写真パネル展」

情報としては遅すぎるかと思いますが、
2008年7月22日(月)から8月1日(金)まで
折紙展としては珍しい写真パネル展が開
かれます。●宝くじドリーム館。東京都中央
区京橋2-5-7日土地京橋ビル1階03-3567-
1192。03-3567-1192 おりがみはうすコレ
クション作品の一部が紹介される。

JOASホール今後の予定

8月の教室はJOASコンベンションのためお
休みとなります。

◆9月20日(土)「知子の部屋」布施知子/
参加費=2,500円/12:30～16:00

◆9月28日(日)「ある折紙作家の教室」神
谷哲史/参加費=3,000円/11:00～
16:00/講習作品=未定

■参加の申し込みはFAX(03-5684-6080)
か、メールinfo@origamihouse.jp宛でお願い
します。これをできない場合は電話でも受けま
す。上記の予定は講師の都合により変更され
る場合があります。事前にお問い合わせくだ
さい(03-5684-6040)。

編集後記

■八坂村おりがみはうす誕生か? ■8月のコンベン
ション後のエクスカッションに海外ゲストと訪れる予
定である。■それまでに少し手を入れ、楽しめる場所
にしたい。■海外から来るゲストに一般的な田舎を
味わってもらえたらと思う。■10月の国際会議後のエ
クスカッションでもゲストの皆さんを案内する予定だ。
■そうやって少しずつ八坂村おりがみはうすが利用
されていければと考えている。■また、作品、資料の
倉庫としても役立てたいと思う。■伏見さんのところ
にもいろいろな作家から贈られた作品があり、保管
場所に困っているという。そういった作品も収納でき
たらと思う。(や)

ホームページ

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>
団員パスワード/Pyramid(大文字・小文字)

折紙探偵団

2008年7月25日発行 第19巻2号 通巻110号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/前川 淳

編集人/山口 真

編集スタッフ/松浦英子、神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

発売元/おりがみはうす

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

定価635円(本体605円)

広告のコーナー



おりがみはうす商品案内

website = <http://www.origamihouse.jp/>

E-mail = info@origamihouse.jp

このページの商品の取扱いはすべておりがみはうすです。
日本折紙学会とは別になります。

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第14回折紙探偵団 折り図集vol.14

日本折紙学会 編 / 2,000円 / 送料420円
B5判 / 全256頁 / 約50作品収録予定

2008年8月15日発売!

※15~17日はコンベンション参加者のみ購入可能

ただいま予約受付中!

申し込み方法は通常の通信販売方法(右下参照)と同様です。送料と本の代金をお送りください(送付先住所と商品名を明記のこと)。コンベンション終了後発送開始致します。

書籍名/著者・編者	価格(税込)	送料	内 容
神谷哲史作品集 神谷哲史 著 山口 真 編 立石浩一 訳	4,000円	国内一律 1冊 420円 (梱包込)※ 複数冊は 異なります	B5判/全228頁/カラー口絵4頁/19作品収録 超複雑系折り紙の創作活動8年間の集大成。
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,200円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫1」 川畑文昭・西川誠司 共著 山口 真 編	3,100円		B5判/全196頁/カラー口絵 4頁/17作品収録 '93~'94年の「昆虫戦争」で誕生した作品の記録
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,500円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/18作品収録 初心者お断り、世界で一番難しい昆虫折り紙の本
折り紙色紙百花 田中具子 著 山口 真 編	2,500円		B5判/全120頁/カラー口絵8頁/31作品収録 色紙に貼り込んで飾る花の折り紙作品集
面~The Mask~ 布施知子 著 山口 真 編	3,300円		B5判/全200頁/全27作品カラー写真紹介 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
空想おりがみ 川畑文昭 著	2,900円		B5判/全180頁/カラー口絵4頁/18作品収録 1995年6月初版発行の恐竜と空想動物の本
第13回折紙探偵団 折り図集vol.13 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作39作品を収録
第12回折紙探偵団 折り図集vol.12 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作52作品を収録
第11回折紙探偵団 折り図集vol.11 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作55作品を収録
第10回記念 折紙探偵団 折り図集vol.10 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作50作品を収録

※第1回~第9回の折り図集は全て絶版です ※書籍は郵便の「ゆうメール」で発送しております。送料には梱包材代が含まれています

限定版 折紙探偵団Tシャツ	折紙探偵団のロゴが入ったTシャツ。 色は黒のみで布は厚手。	XS, S, M, L, 各サイズ 定価 2,000円/2着まで送料500円 ※数に限りがありますので、ご注文の際には在庫を確認してください。
----------------------	----------------------------------	--

商品名	価格(税込)	送料	内 容
恐竜柄おりがみ用紙	1,000円	国内一律 1~2セット 440円	35×35cm/10枚入/70kgの 洋紙に細かい恐竜模様を印刷
恐竜柄おりがみ用紙 折り図つきセット	1,200円		恐竜柄おりがみ用紙+ ドラゴン(北條高史作)の折り図

※紙製品は定形外郵便で発送しております(書籍とは別発送になります)。送料には梱包材代が含まれています

書籍2冊の送料は 530円 / 書籍3冊の送料は 670円 (例外を除く・下記参照)
例外:「折り図集」又は「色紙百花」だけを3冊の場合(例:折り図集12,13と色紙百花1冊)のみ 530円

上記以外の場合はお問い合わせください。書籍と紙製品は別発送となりますのでご了承ください

只今制作中 発行日は未定です。気長に待っていて下さい

小松英夫折紙作品集 / 小松英夫・著 じんわりと進行中。待て次号。
北條高史折紙作品集 / 北條高史・著 あの名作がバージョンアップ?
折紙図鑑「犬」 / 佐野康博・著 犬の折り紙第一人者の遺作集

本ページに記載していない商品は、現在取り扱っておりません
ご送金頂いてもお送りできませんのでご注意ください



ギャラリー おりがみはうす

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216
TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080
E-mail: info@origamihouse.jp 10時~18時 日・祝休

商品の申し込み方法

先に郵便振替か現金書留で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させていただきます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。
※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。
※現金書留の場合は左記の住所へお送りください。
※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。

「折紙探偵団」専用ファイル

変形B5判/信挿し口
「折紙探偵団」専用ファイル
1冊750円(送料込)
2冊1,350円(送料込)
3冊1,950円(送料込)
※ファイルは定形外郵便で発送します
(書籍・紙とは別発送になります)
送料には梱包材代が含まれています

■商品を複数ご注文の場合は、送料が変わってきます。電話又はメールでお問い合わせください。

広告有効期限:2008年9月25日

¥600
(税抜き)

豊富な色数なんと100色！



100
COLOR
PAPERS

カラーペーパーは両面同色のコシがある紙なので
しっかりとした作品に仕上がります。



※色見本と現物は若干異なります。

ト-ヨ-

豊富な色数なんと100色！

TANT
タント

100
COLOR
PAPERS

カラーペーパーは両面同色のコシがある紙なので
しっかりとした作品に仕上がります。



なべしきの折り図付
15cmで折った場合作品サイズは
直径約21.0cmになります。

ペーパーサイズ:15.0×15.0cm 100枚入(100色)



株式会社ト-ヨ-

ホームページ <http://www.kidstoyo.co.jp>

●写真は印刷ですので実際の商品とは色は違う場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になることがあります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡営業所 / 札幌出張所 / 松山出張所

日本折紙学会発行 定価 635円 本体605円